TURN JOURNAL

SUMMER 2020 ISSUE 04

障害の有無、世代、性、国籍、生まれ育った環境などの背景や習慣の、違いを超えた出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクト「TURN（ターン）」。一人ひとりの異なる特性を掘り起こし、あらゆる意識や枠組みを更新していくことを目指しています。「TURN」の取り組みとそれらの意義を、様々な角度から伝えていく定期刊行物『TURN JOURNAL（ターン ジャーナル）』は、これまで冊子という形で、年に1～2回発行してきました。2020年度は、日々変化してゆく「TURN」とそれらを取り巻く世界について、その時々の声や状況を伝えるメディアとして、装いも新たに、夏・秋・冬・春と定期的に発行していきます。

特集

一人ひとり、コロナ禍にどう向き合う？

みなさんからの寄稿

TURNした今の社会、今の声

2020年度最初の号となる夏号では、これまでにTURNにかかわっていただいたアーティストや施設スタッフなど、様々な領域で活動されている方々に「質問」を投げかけ、「今の声」を聞きました。（執筆期間5月中旬～6月上旬、寄稿者85名、五十音順掲載）

質問

新型コロナウイルスの感染拡大と、それに伴う様々な社会の変化が起こるなか、私たちの日々の活動や文化的な営みも大きな変容を余儀なくされています。あなたは、そんな「TURNした今の社会」にどのように向き合い、そのなかで、どんなこと（可能性、問題点…）を感じていますか？　文章もしくはお好きな表現スタイル（絵、写真など含む）で教えてください。

【質問の趣旨】

人と会うことができない。好きな場所に行くことができない。日常を「ただの日常」として過ごすことができない…。新しい感染症の登場によって訪れたそんな日々のなかで、みなさんの内面には一体どんな動きが生まれているのか？今回の特集に向けて考えた質問文の背景には、そんな素朴な関心がある。

この間、通常の文化活動が行えなくなるなか、文化芸術関係者の関心の多くは、補償や施設再開に向けた手続き論など、「現実的」な課題に向かっていた。無論、そうした議論も大事だが、一方、ペストからHIVまで、過去に多くの感染症が文化芸術に新たな局面をもたらしたことを想起するなら、私たちは同時に、コロナ禍のもたらす「想像的」な次元への影響にも目を向けるべきではないか。

もしかすると、ある人にとってそれは、現代を歴史の大きなスケールで俯瞰（ふかん）する機会となり、またある人にとっては、日常の些細（ささい）な光景の手触りを変える契機になったかもしれない。重要なのは、その規模の大小にかかわらず、個人のなかで起きたそれぞれの動きが、今後の文化芸術の種となり得ることだ。そんな時代の一断面を、ここに記録したい。

（杉原環樹）

【社会の動向】

ここでは2020年上半期の新型コロナウイルスをめぐる主な出来事を時系列で振り返る。

▼中国・武漢市で原因不明の肺炎患者が確認されたのは2019年12月のこと。2020年1月14日、世界保健機関（WHO）がその原因として新型のコロナウイルスによる感染の可能性を指摘する。16日、日本でも初の感染者の確認が発表される。30日、WHOは「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言。

▼2月3日、横浜港に感染者の乗るクルーズ船が入港。この時期より厚生労働省が感染症対策としてマスク着用・手洗いを推奨。26日、イベント自粛、国立の美術館・博物館に閉館要請。27日、全国の小中高校に休校要請。以降、全国の文化施設や劇場が次々に閉鎖された。2月末より国民生活が一変。小売店からトイレットペーパーやマスクが姿を消す。

▼3月3日に公表された時間外労働等改善助成金の特例等により、新たにテレワークを導入した、または特別休暇の規定を整備した中小企業事業主への支援が開始された。9日、新型コロナウイルス感染症対策専門家会議、集団感染に共通する三条件を指摘（のちに「3密（さんみつ）」と称される）。11日、WHOは感染症の世界的流行を意味する「パンデミック」を宣言。各国で外出制限が広がる。24日、東京2020オリンピック・パラリンピックの延期が決定。25日に東京都の感染者数が累計200人を超え、警戒感が強まり、東京都は平日の在宅勤務、夜間・週末の「不要不急」の外出自粛を要請。街から人が消え始める。

▼4月1日、日本医師会、「医療危機的状況宣言」を公表。この頃、医療機関等のマスクや人手不足が深刻化。7日、日本政府は東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県を対象に5月6日までの「緊急事態宣言」を発令。人と人の接触を極力8割減らすことが求められる。ステイホーム、ソーシャルディスタンス推奨。11日の東京にはじまり、各都府県、順次事業者への休業要請。16日、「宣言」は全国に拡大。18日、クルーズ船を除く国内感染者が1万人を超える。

▼5月4日、「宣言」の5月31日までの延長、「新しい生活様式」の発表。一方、地方を中心に、7日より休業要請の解除、美術館・博物館等の再開がはじまる。14日には39県で、21日には関西3府県で、そして25日には全国で「宣言」が解除された。東京都では26日から段階的な休業要請の緩和がはじまる。

▼6月2日、感染状況の悪化を受け警戒を呼びかける初の「東京アラート」が出されるが、11日に解除された。

JOURNAL

文化でつながる。未来とつながる。
Tokyo Tokyo FESTIVAL

CONTENTS

みなさんからの寄稿●TURNした今の社会、今の声 ―― 1－7, 9－11, 14－23
特別寄稿①　監獄化する世界の中で――あるいは距離の遠さと近さについて
藤原辰史［歴史学者／農業思想史・農業技術史］ ―― 8
特別寄稿②「異」から「違」へ　磯野真穂［人類学者／医療人類学］ ―― 18－19
アートのX（エックス）　日比野克彦［TURN監修者／アーティスト］ ―― 12－13, 24

1 個人の修復の時代

アオキ裕キ［ダンサー／振付家］

体は社会から切り離せないものであり、この世界規模の体験のストレスはごまかすことなく、可能である限り素直に痛みとして受け止めることが大切だと思っています。

個人がもっとも強く感じたストレスの要因がなんであったのか。裏返せば、当たり前として備わる日常における偏った価値観や、当たり前に思っていた習慣に潜む欠点が強く露呈する機会になったと感じています。

大きな箱庭のような社会の中で増え続ける制約は、個人の思考や身体性を失わせ、人は言われるがままに機械的に生きることが幸せだという考えを、刷り込んでいく危険性を強く感じます。

僕は9・11の経験後に「新人HIVケリッサ!」と出会いました。

シンプルに生きることに向き合う身体は、経済至上主義の中で当たり前としていた表面的な見栄えの良さに囚われていた自分の痛みを修復する大切な要素でもありました。

それぞれが負った痛みの修復に、これからどのくらいかかるかはそれぞれでわかりませんが、個人個人の意識や生き方の修復が大切になっていくように思っています。人は個人から始まり、便宜的にも有効な集団を生んできました。修復の作業は人を強靭にすることができると感じています。

僕らの踊りも、それぞれの負った痛みからどんな踊りが生まれるのか、それは社会に属する体として大事な瞬間だと感じます。

——

あおき・ゆうき　「今を生きる身体から生まれる踊り」を求めて2005年、路上生活経験者とともにダンスグループ「新人HIVケリッサ!」を開始。TURNフェス3・4に参加。

2 変わらない活動と飾らない発信

赤荻 徹［アトリエ・エー、エイブルFC主宰］

5月時点、「コロナウイルスの終息が見えないので、はたしていつから活動（ダウン症、自閉症の子供たちを中心とした絵のクラスとサッカークラブ）を再開していいものか見当がつきません。

参加する子供たちが、感染症や長期入院に対してリスクが高く、弱者になりやすいという認識でいるし、そもそもがそれぞれの休日に集まる場所としてスタートした「みんなの余暇の活動」なので不要不急。でも、なるべく早く再開したいと思うのは、「次のアトリエはいつですか♥」なんていう嬉しいメールが子供たちから続々と届くからです。

これまで「休まない」をモットーに18年間続けてきた活動を、今回、事もなく休んでしまったことで、僕たちにとっても、たしかにこれからは「TURNした社会」での活動となります。でも、Zoom（ビデオ通話アプリ）でリモートアトリエができるわけでもないし、むしろコロナ以前と変わらないことが、参加する誰かにとっての価値になればいいなと、都合よく思っています。

僕、個人的には、自分がはじめたこの活動を介して、たくさんの人がつながって、ときには僕も知らない新しいコミュニティが立ちあがり、広がっていくことをずいぶんと楽しんできました。その広がりのなかには、ダウン症の人も、自閉症の人も、その親もきょうだいたちも、僕のむかしからの友だちも、はじめましての人もいて、ひいき目で見ても、ここに僕が理想的だと考える、人と人との関係性がたしかに存在しています。

誰もがやさしくて、誰もが祝福する場所で、多様な人と一緒に過ごした時間があるかどうかは、その人の未来に少しかかわってくるように感じます。とても小さな活動ですが、コロナ以後も変わらず、飾らない発信を続けていきたいと思います。

——

3 つながるってどんなこと?

朝倉景樹［シューレ大学 スタッフ］

「シューレ大学 は不登校や引きこもりを経験した若者が自分に合った生き方を見つけていくところです。不登校や引きこもりを経験すると、「人が怖い」ということも経験します。

今回のコロナ状況でシューレ大学は活動をオンライン化しました。そうしたら、「家にいることを罪悪視しなくてすむ」「電車やバスに乗らなくてもすむ」ということで気持ちが楽になったという声もあれば、「苦しくなった時にシューレ大学の空気に触れて安心できたのに行けなくてしんどい」とか、「不安が膨張しやすくなった」というような声もあります。

Zoom（ビデオ通話アプリ）でつながれるというのは、人目に触れる移動をせずにつながれたり、遠くに住んでいる学生も頻繁に参加できたりという良い点もありました。でも、気配を感じ合って安心することは難しいです。また、2か月のオンラインでの活動を終え、念願のFace to Face（対面）の活動が再開という段になり、「再会が嬉しいのに、緊張する」という声も複数聴きます。

3・11の時もそうでしたが、大きな災害のような経験をすると、以前から内包していた深い課題が浮き彫りになることを思い知らされます。コロナ状況下でコロナ離婚、虐待、いろんなことが起きました。私たちは直接会えるようになった時、デジタル技術を使いながら、どんな風に安心できるつながり合いをつくっていけばよいのかが問われていると思います。

——

あさくら・かげき　東京都新宿区にある、一人ひとりが自分の教育をデザインしながら自分に合った生き方を創り出すオルタナティブ大学「シューレ大学」スタッフ。「シューレ大学」は、TURN交流プログラムを継続中、TURN LAND、TURNフェス1〜5に参加。

4 夕方7時、自宅のベランダにて

アサダワタル［文化活動家］

11分18秒の音源

——

あさだ・わたる　音楽と言葉を手に、属性に埋もれない「一人ひとりの個性」に着目したコミュニティづくりを行う。品川区立障害児者総合支援施設のアートディレクター（愛成会所属）。TURNフェス4に参加。

5 未来に向けてのExchange

安部 良［建築家］

「コロナの影響で世界中にIntimacy（親密）の感情が広がった」と、現代美術家オラファー・エリアソンが語っていた。自分以外の誰かへの影響を考えながら日々の生活を送り、自分以外の目線で世の中を見ることを誰もが経験した。人間の活動が止まった数ヶ月で地球の環境がどれくらい良くなったかな、とも考えた。細菌とか動植物とか地球とか、地球圏外とか、人間以外の目線でも考えてみる。コロナの間、こうした思考の癖がついて想像力が少し豊かになった気がする。

緊急事態宣言が解除された。少しずつ以前と同じ生活や同じ世界に戻るのかな？　と思ったら、とても勿体無く感じられた。思考を広げるチャンスにしたいと考えた。以前と生活をどれだけ変えていけるのか？　どれだけ違った世界を創っていけるのか？　小さな実験を日々の自分の生活の中に取り入れていきたいと考えた。

6 それぞれの人に合った「日常」へ

飯塚貴士［人形映画監督］

僕のひきこもり体質な面（主な制作活動が部屋に籠もって人形を動かして動画を撮影する事、趣味は家でゲームをすること）は、これまで周囲にネガティブな印象を与え続けていました。

それが今回多くの人が自宅待機せざるを得ない状況になった際に、ネガティブでないものとして受け取られたことにとても驚いています。

自分は大人に成長できなかった社会不適合者なのだと呪いの様に思ってきたのに、引きこもって制作をしたり遊んでいる事が社会に適合した瞬間が（一瞬でも）生まれたことは、人生最大ともいえる衝撃でした。

周囲の話を聞いてみると、意外と在宅の方が良かったと言っている方も少なくなかったり（多くはないですが）するので、この際それぞれがそれぞれに合った働き方や生活の仕方が選択できる世の中になっていったらいいなと思います。誰かが作った常識に倣って戻していくのではなく、各々の価値観や適正に合った普通を生み出しながら、日常を取り戻していく事を望みます。自分の中にある常識をちゃんと疑いながらですが。

——

いいつか・たかし　人形とミニチュアを用いた特撮映像を制作。監督、脚本、撮影、美術、音楽、登場人物の声をほぼ一人で行う。大田区障がい者総合サポートセンター「さぽーとびあ」の余暇活動支援「たまりば」にて活動中。TURN交流プログラム、TURNフェス5に参加。

7 当たり前の「食」から遠く離れて

EAT＆ART TARO［現代美術作家］

コロナでいろいろな変化があったが、大きく変わったものの一つは食生活だろう。飲食店に行かずに、オンラインで飲み会などを行う機会も多くなった。

今考えることは、元の生活に戻っていくのだろうか？　ということだが、答は一つではないはず。この状況下になり、「早く居酒屋に行きたい！　みんなとワイワイしたい！」と思う人もいれば「オンラインの方が好きだった、そっが僕は賑やかな場所が苦手だったんだ」と思う人もいる。自炊生活が長く続いて「お店に行かない美味しいものが食べられない」と思う人もいれば、自分の料理の才能に目覚めて「自分で作った方が美味しくて楽しいや」と思っている人もいる。

これまで食事は、みんなで集まって食べるのが良いという考えが強かったかもしれない。人と会えなくなって体調が崩れている人もいれば、人と会わない心地よいかは人それぞれ、人生のタイミングでも変わってくる。この期間中に多くの人が自分の特性に気が付いたのではないだろうか？

これまで当たり前のようにしていた生活から離れることによって、個人の嗜好について寛容になれる。多様性というものが広がる第一歩は自分の食事にわがままになるということだと思う。

——

いーとあんどあーと・たろー　「食」をテーマにしたアート作品をつくる。TURNでは、噛む食、摂食障害などの領域へのリサーチ的アプローチを展開。TURNフェス1・2に参加。

8 上空10000mより

五十嵐靖晃［アーティスト］

コロナ終息後、世界は変わるだろう。

我々は、今回のコロナウイルスをきっかけに生活を見直し、たくさんのいらないものに気がついたはずだ。ないものを求めるのではなく、あるものから何を見出せるか。それこそがアートの本質である。

これまでの常識を捨て、目の前のモノやコトにはじまりの心で触れる時、自分の中に眠る〝まなざし〟に出会うことができる。

今まさに起きている、あなたの中の発見の旅は、これからやってくる新たな世界に向けての良い準備となるだろう。

その旅は人間らしさをとりもどす旅だ。

では、さしあたって、目の前にある糸を玉にするところからはじめてみよう。

そこには我々人類にとって普遍的な所がある。

そこからいろんなところへ行けるはずだ。

2020年4月25日

——

いがらし・やすあき　人々との協働を通じ、土地の暮らしと自然を接続する活動を各地で展開。TURN交流プログラム、TURN LAND、TURNフェス1〜5、ブラジルで開催されたTURN in BRAZIL、アルゼンチンで開催されたTURN in BIENALSUR に参加。

9 新しい3つの取り組み

井川 丹［音楽家］

この自粛期間中に新しく始めた取り組みを3つご紹介して、回答に代えたいと思います。

①お花と音楽の往復書簡

TURNで交流中の「アプローズ南青山」の皆さんと直接顔を合わせることができないため、お花と音楽による往復書簡のようなやり取りを試みようとしています。まずは私から、昨年度の交流を通して書き留めた短いメロディーを録音してお送りし、フラワーアーティストである利用者さんたちからのお花のお返事をどきどきしながら待っているところです。

②ズレてもいいリモート合唱曲

3密を体現したような行為である合唱は、当分再開できそうにありません。そこで、通話アプリを利用して演奏するリモート合唱曲を作りました。現状の技術では避けがたい通信の遅延や種々の違和感を逆手にとり、これらを積極的に音楽に取り込んで楽しんでしまおうという試みです。ズレることを前提に、前後の音が混ざってもリズムが揃わなくても魅力的な響きとなることを目指しました。一見じゃま者でしかないズレの中に、未開拓の音楽の楽しみ方が眠っている予感がしています。

③リモート共同アトリエ

それぞれの家をインターネットでつないで皆でアトリエの時間を過ごそう！　という、リモート版こども創作教室に講師役で参加しています。どうしても「これまでと違う」ことに囚われてしまう中、こどもたち（4〜5歳）が驚くほど自然に新たな状況に順応している姿が頼もしく、少しうらやましくもあります。

——

いかわ・あかし　「人の声」を創作の中心に据え、表現活動を行う。フラワーアレンジメントを仕事とする就労継続支援B型事業所「アプローズ南青山」とのTURN交流プログラム、TURN LAND、TURNフェス5に参加。

10 TURN 今の声

池田晶紀［写真家］

「今の声をお聞かせください」というご連絡を頂いたので、「今の声」ってことについて、少しだけ考えると、「今」を獲得は出来ないことが、「今」なので、「最近の声」とか「近頃の」といった感じで、2020年5月28日の朝5時40分ごろにテキストを書かせて頂いております。

さて、コロナのことで緊急事態宣言が発令され、自宅自粛を余儀無くされたことで、社会状況も価値観も変化していき、日々たくさんの情報が飛び交っていますよね。これをきっかけに自分たちの生活は今後どうなるんだろう？　と、今みんながそう考えている時期なんだと思います。

「写真家は人に会うことが仕事です」

人に会えないことや移動が出来ないというのは、このTURNのプロジェクトとしても、交流を！ということが大前提な活動プランなだけに、今どうしたらいいんだろう？　ってことにぼくも最初は、がっつり直面しました。

そんな中この貴重なというか、これまでに経験のない機会がやって来た時に、ぼくもみんなと同じように、いろんな自宅で出来ることを、今のうちにやっておこうと、ちょっと先の未来のことを計画したものも含め、いろいろ試行錯誤しながら種まきみたいなことをやってはいます。で、その中のひとつにTURNのみなさんとの今後の活動プランや、〈会う〉ということについての価値への変化などをもう一度考え直すチャンスとして捉え、今一度これまでの活動を振り返るように見直してみました。

ぼくの場合、映像のドキュメントや写真などが主なアウトプットの形なので、とても振り返りやすく、少ししみじみとした気分にもなりました。

この「今の声」にお返しするお返事としては、この時期に一度立ち止まったり、考えたりするチャンスがやって来たのであれば、これまでのアーカイブを出来るだけ今のやり方で多くの人に伝える試みをやってみるのも、いいのかもなっと思いました。展開の仕方や工夫はいるかも知れないですが、あるもので、あったものをもう一度思い出すために、忘れないで、変わらないでいようと思える良さは、どこにあったのか？　に気がつけば、次がまた変わってくるのではないかな〜と、思えたからです。そこ、ぼくも考えます。

長々となってしまいましたが、TURNの運営メンバーの皆さまのこれまでの誠実な取り組みと、こうした社会状況の中でも前向きな取り組みとして、お声がけ頂き、感謝申し上げます。ありがとうございます。引き続き、またおもしろいことをやっていきましょう。

こちらからは、以上です。

——

いけだ・まさのり　写真とデザインの会社「株式会社ゆかい」代表。写真家としてだけでなく、クリエイティブディレクター、映像ディレクターとしての活動も行う。TURN交流プログラム、TURNフェス1〜5に参加。

TURNフェス2で発表した、東京都昭島市の知的障害のある人が働く通所授産施設「社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンター」の映像作品「好きなもの」のキャプチャー

11 「新しい生活様式」の中で漂う〝わたし〟

石川絵理［特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（TA-net）事務局長］

人類はその誕生以来、様々な脅威にさらされる中で順応しながら綿々と営んできた。今回もまたしかり。

私の周りに起きた一番大きな変化は、オンライン化という観劇スタイルの変化であったが、以前と同じように手話もなく文字もなく、私はただあてもなく漂うのみであった。

今やマスクは必須になり、フィジカルディスタンスを求められるようになったが、その物理的距離を様々な技術や工夫で超えていこうとしている。

私たち「TA-net」もそのうねりに乗り遅れるなとばかりにオンラインで行われる文化芸術関係のイベントに手話通訳や字幕を付けるよう働きかけたり、文字化の手伝いをしたりした。それが多くの方々の目に触れ、手話通訳を必要とする存在を知ってもらうことができた。また、以前はなかなか動いてくれなかったのが、オンラインでお願いすればすぐに対応してくれるようになったのも、大きな変化と言えるだろう。

そしてまた手話も、物理的距離を乗りこえる手段の一つとして普及していくだろう、と予想している。2m離れても、間に仕切りがあってもそれが透明なガラス等であれば、手話なら難なく話せる。

「新しい生活様式」の中で漂う〝わたし〟は、一人ぼっちじゃない。

—

いしかわ・えり　ろう者。「TA-net」は、聴覚に障害のある当事者が主体となって観劇支援を推進する活動を展開。TURNでは年間のプログラムを通して、アクセシビリティコーディネートを担当。TURNフェス3~5に参加。

12 とにかく生きよう

イシワタマリ［美術家／山山アートセンター代表］

変化の只中にあるとき、私たちはそれについて何がどうだとハッキリ言語化することができません。言葉にならないモヤモヤがひとりひとりの心身に蓄積しつつある、というのが今の状態だと思います。

かたちにならなさを焦らず、数年先に見ていたいと思う世界の方角をほんやり向きながら、日々のふるまいをシミュレーションしています。私の場合はなるべくこまめに庭や畑の植物のようすを見るとか、人を愛するための距離を工夫するとか、自分が今求めている色／味／声を知っておく（今すぐ叶わなくても）とか、そんな地味なことばかりです。

「山山アートセンター」はこれまで、「アートに軸足を置きつつよくよく考えてみると実は福祉、というさりげない施設をつくる」という野望を抱いてきました。今の社会状況はこの野望をいっそうくっきりとさせます。

最近は、アートセンターゆかりのアーティストらと共に「孤独の山びこ―山山よもやま相談室―」と題したオンラインの場をつくり始めました。これもまた、すぐにかたちにはならなくとも少しずつ未来へ向かっていくためのふるまいのシミュレーションとして。

とにかく生きよう。

—

「山山アートセンター」の畑にて

いしわた・まり　京都府福知山市で、様々な人が力を持ち寄って、とにかく生きようとするプロジェクト「山山アートセンター」を主宰。TURNフェス4に参加。

13 ここからは私たちのTURN

井谷優太［電子音楽家／パフォーマー］

14 壊れた言葉、紡ぎ直せるのか？

伊勢克也［アーティスト］

まずちょっと気になることがあって、「TURNした今の社会」っていう表現ですけど、この〝TURN〟は「TURN PROJECT」でいう意味のTURN〟なの？　ってことですね。なんかとても違和感を感じてしまいましたね。そもそも、この今の状況の社会ってのは「TURN〟ではなくても、本当に〝TURN〟したんですかね？

といったような言いがかりをつけたくなるムードに今僕はいますね。今まで流してきた言葉がいちいち気になる。曖昧な表現で「なんかそんな感じ」みたいなことが嫌になってる。「なんとなく」で後回しにされている事柄が多すぎてキツい。

強い言葉が欲しいなあ。完全に分かり合えることはできないってことの上で、コミュニケーションを豊かにするための強い言葉…？　よく解らないのだけれど。

何か人智の及ばないような出来事が起きると、言葉が壊れてしまう。3・11の時がそうだった。グシャグシャになった言葉を拾い集めて、また組み合わせ直さなければならない。今までとは違う新しい言葉のセットを作らなければならないのだけれど、言葉の持つ意味が変わってしまったので厄介な仕事となる。

—

いせ・かつや　様々な環境で発生し存在するモノやイメージがつくる形態をテーマに制作やワークショップを行う。TURN交流プログラム、TURNフェス4~5に参加。

2017年、2018年にTURNフェスに出演させて頂きました、井谷優太です。現在はサウンドクリエイターとして、鳥取県でリモートワークでの作曲活動をしています。

今回の新型コロナウイルス感染拡大で大きな変容を求められている「TURNした今の社会」の中で、まず私が感じているのは、この大きな出来事は世界規模で社会を見直し、より良い方向へバージョンアップさせる、またとないチャンスなのではないか？　という事です。

確かにコロナが社会に多大なダメージを与えたという事は言うまでもないのですが、その事をきっかけに今まで何も疑わずに運用してきた「コロナ前の社会構造がいかに色々な面で脆い社会であったか」が、今までになく鮮明に浮き彫りになっていると思うのです。今回はこの問題を社会全体で改めて共有できた事が、コロナで各国大変な被害を受けている中で、何よりも人類にとっての救いであり、これから立ち上がる際の希望になるのではないかと、私は強くそう思っています。

また、みんなが一斉にステイホームになった事をきっかけに、リモートワークへの可能性を人々が改めて認識した事によって、それまで在宅ワークをそれぞれの事情で選択せざるをえなかった人たちと、一般的な働き方をしてきた人たちとの接点が生まれました。このコロナ禍によって、今後は障害や家庭の事情により自宅から出られなかった方々も、一般社会と繋がれる機会がかなり多くなっていくのではないかと確信しています。

実際に私もこのステイホームの良い効果でインターネットを通じて、普段だと出会わないような、これまで一緒にクリエイションする機会を持てなかった方々との繋がりも増えている。栗栖良依（くりすよよ）さんがステイホーム中にスタートしたYouTube（ユーチューブ）ラジオ番組への出演や楽曲提供をはじめ、石谷依利子（いしたにえりこ）さんのオンラインYOGA教室への楽曲提供の実現等々、コラボレーションの機会も多々生まれており、そういったリモートワークの普及による社会的な良い効果は、今後も続いていく可能性があるのではないかと身を持って感じている今日この頃です。

しかし、コロナ関連のネガティブな情報が飛び交う中で、こうしたコロナ禍によって起こった良い側面は、まだ社会全体には届いていない可能性が高いのではないかと感じるところもあります。今後はそういった社会を再構築する上で希望となりうる情報を、より良い新しい社会の実現へ向けて、自身のアーティスト活動と共に発信していければと考えています。

—

いたに・ゆうた　手足に障害があってもライブで演奏できる方法を独自に考案し、表現活動を通して、心のボーダーレス化を追及する音楽家。TURNフェス3・4に参加。

15 コロナの時代でかみしめたこと

伊東俊祐［アート・コミュニケータ／國學院大學大学院博士課程後期］

最近、〝武器がものいうとき、ムーサ達は沈黙する（*INTER ARMIA SILENT MUSAE*）〟という、ラテン語の古い慣用句があることを知った。「ムーサ達」とは、ミュージアムやミュージックの語源ともなった、ギリシア神話に登場する学問や芸術をつかさどる九柱（ここのつ）の女神の総称だ。いわば、〝平和な時代に、ムーサ達は栄える〟という裏返しともなるが、コロナがものいう時代においてはグローバルに沈黙することを余儀なくされている。

それだけにとどまらず、これまでの私たちの営みを激変させるほどの影響をもたらし、私自身もオンラインやテレワークの波をうけて画面を介しての手話を含むコミュニケーションが日常になってきたほどだ。とはいえ、デジタル・インクルージョン（デジタル技術の社会的浸透・包括）の進歩にも目を見張るものがあり、聴覚に障害がある私でも音声認識をはじめとするテクノロジーを応用していくことで、コミュニケーションはもちろん、文化芸術へのオルタナティブな参加も次第に可能になってきた。

むしろ、これまで以上にコミュニケーションの量や質はふえてきたように思うし、この時期に身をおいているからこその気づきであろうか、テクノロジーの恩恵はもちろん、あらためて〝つながる〟ことの心地よさ、大切さをもかみしめている。

いうならば、ムーサ達は沈黙しているのではなく、いつだって微笑みつづけているのだろうか。いわゆる「新しい生活様式」の提唱などに代表されるように、もはや以前に戻ることはできないとさやかれつつも、逆にコロナの発生がこれまでのあり方を客観的にみつめなおすための時間をもたせ、あたらしい営みを創造し、享受していくことで、さらなる一歩へと足を踏み入れていくためのひとつのきっかけを与えてくれたことは間違いない。

私たちは、21世紀の大きなうねりにでさえ対応していくことを求められつつも、ポジティヴにとらえれば多くのポテンシャルに富んでいるようにも思う。

—

いとう・しゅんすけ　専門は博物館学、ミュージアム・スタディーズ。アクセシビリティやインクルージョンをめぐる活動を通して、多文化社会のなかのミュージアムのあり方を研究。TURNフェス5に情報支援のための手話動画の制作メンバーとして参加。

16 私達の「今日」から「明日」

今井さつき［アーティスト］

今のTURNした世界に、私ははじめ少し混乱した。やる気が起きなかったりして、日が沈んで昇ってを繰り返した。やがて少しずつ色々なことができるようになった時、私のサイクルは世の中の24時間とはちがうかたちで「今日」から「明日」へと動き出した。

本を読んだり、友人と話して発見したり、新しい作品プランを思いついたりと、どんどん体が漲（みなぎ）る感覚。それを私は「明日」に自分がやってきた、と思った。

それからは、朝ご飯からお昼ご飯になる頃にはもう「明日」になっていたり、逆に朝ご飯を3回迎えても「今日」だったり、色々な「今日」から「明日」の移行をしている。

私は誰が決めた時間のサイクルじゃなくて、私のサイクルの「今日」から「明日」を見つけた。

いつも「明日」へ向かう時、自分の中で太陽を揚（あ）げている。いつも違う太陽を自分の手で滑車を引くみたいに。

これを読んでいるみなさんは、いつ、何をしたら「今日」を終え「明日」へ向かうのだろう。そんな話ができたらいいと思う。きっと一人一人の「今日から明日」があるはず。

そんな終わりのない問いを考えているところ。

—

いまい・さつき　体験者が作品を体験することで完成するコミュニケーションアートの制作を行う。TURN交流プログラム、TURNフェス1~5に参加。

17 地面から遠くの星を見るように

岩田とも子［アーティスト］

部屋の窓の前に立ちシュルシュルシュルっと白いロールカーテンを両手で巻き上げ、ガラス窓の鍵を恐る恐るガッチャンと回す。窓を開ける前にそっと目を閉じてから優しく一気に窓を開ける。何の音ともはっきり言えないゴォーとかザーっという音が入ってきた。目を開けると少し離れた公園の大きなメタセコイヤの木が葉を揺らしているのが見えた。少しするとその葉を揺らしていた風が窓から家に入り部屋の植木鉢の木の葉を揺らした。

家の中で窓の外を眺めることも多く、外で自由に動き回る風や世界中を回る太陽が羨ましい。窓の開け方をいつもと変えたら何か外の世界が変わりそうな気がして色々と試すこと一カ月。開け方のヒントになるのは自分とは全然違う誰かの日常なのではないか…、不思議とそんな予感がする。

いつの間にか様々な意味で不自由な暮らしを強いられるようになってしまったけど、そもそも私たちは地面から自由に離れて宇宙を飛び回ることはできない。〝ここ〟にいながら月や星、空のもっと向こうを見ようとする楽しみ方を探るように窓の前に立つ時間を過ごしている。

—

いわた・ともこ　身近な自然物の観察・採集から宇宙的なサイクルを体感するような作品を制作する。TURN交流プログラム、TURNフェス4~5、アルゼンチンで開催されたTURN in BIENALSUR に参加。

18 おもしろい人生に、リスクはつきものやなあ

上田假奈代［詩人／NPO法人こえとことばとこころの部屋 cocoroom（ココルーム）代表］

月がでている。どっちに出ている。月はひとつか。目が悪くて、ぶれて、何重もの月がみえる。どの月が本物か、わかる？　いつだって、答えがあるわけじゃない。不確実な。それが出会いだ。

貧しい者たちは、みえなくされる。貧しすぎて語ることができないうえに。雨が降る。かすんで、ますます遠くに感じる。近づくためには、どうしたらい？　近づいたら、どうしたらいい？　近づきたくない人に、どうしたらいい？

濃厚接触はいけないのでしょ。だから、気にしなくていい。離れていていい。

いえ、お金とは濃厚接触したいのでしょ。

貧乏神とは、おさらばしたいのでしょ。

おさらば、おさらば。さらに盛る毒。

毒味をしたら、スプーンをなめて、月を映す。

照りかえす顔。

頬はひろがる。おでこがひろがる。

わたしのしらないわたしの顔。

たわしでこする。

皮膚に接触する毛先の現実。

黒子にも名前がある。

あまたの星に名前があるように。

昨日と今日はちがう名前だ。

道はわかれる。

おもしろいほうを選ぶんでしょ。

転んで、擦りむいて、おでこを押さえても。

その手で、月を指さして。

—

うえだ・かなよ　大阪府大阪市西成区（通称、釜ヶ崎）で、日雇い労働者や旅行者が集う、ゲストハウスとカフェと庭を持つスペース「cocoroom（ココルーム）」を運営、多様な活動を展開。TURNフェス4に参加、第10回TURNミーティングに登壇。

19 TURNする社会に

上原耕生［アーティスト］

90年代以降、インターネットの普及により、世界中で同時に遠隔の情報共有が行える様になり、私達が〝空間〟や〝遠隔地〟に感じていた従来の物理的な感覚が大きく変わった様に感じています。

2000年代、地域の活性化を図るアートプロジェクトの多様性と可能性が日本中に広がっていきました。

そして2020年。世界は新型ウイルスと共存しながら、既に半年が過ぎようとしています。私達は今、これまで当たり前に、出入りしていた密閉された展示空間や、多くの文化施設の集中する大都市の密集地リスクと向き合わなければなりません。もしも、このままウイルスとの共存生活が続くなら、一極集中型の大都市圏の在り方を社会全体で見直す好機なのではないかと、なるべく前向きに考えようとしています。

今、これまで見落とされてきた地方の可能性の見直しはもとより、私を含む多くのアーティストは、制作や展示空間の可能性を問い直し、表現手法の実験と開拓の過渡期に居るのかもしれません。私はこの10数年間、ホワイトキューブに依存しない実験的な自分なりの作品展開にチャレンジしてきました。今の社会の時流が、他のアーティスト達の今後の表現活動に、どの様に影響していくのかは解りませんが、改めて私自身が今後の社会の荒波の中で、どうサヴァイヴしていけるのかと考えています。

—

うえはら・こうお　現場の長期リサーチを行い、壁画制作やアートプロジェクトを展開。茨城県久慈郡大子町にある「袋田病院」に勤務、「アトリエ・ホロス」を拠点に制作サポートやアートフェスタの運営を行う。「袋田病院」としてTURNフェス4に参加。

茨城県久慈郡大子町にて、過疎化する商店街の壁をキャンバスに見立て、錆で町の風景を描く。旧「中華大景」の壁。《大景》2018年

20 「接して・触れて」が人間なんだな

梅谷則子［桃三ふれあいの家 施設長］

来所してくださるボランティアの方々に刺激を受ける日々が一転、入場人数を制限される日々に変わり、豊富なプログラムが自慢だった「桃三ふれあいの家」も限られた職員で運営をしました。

ご利用者の生命を守ることに精一杯でしたが、先の光が細々と見えてきた今、再び生活の質を戻すことに力を入れています。TURN交流プログラムに参加するアーティストの伊勢克也さんが「ここは好きな場所」と言って下さるように、変化を受け入れながら皆さんの行きたい場所で有り続けることが大切と感じました。

このような状態でも不変のものは必ずある！ リモートではない、「接して・触れて」が人間なんだなと感じながら、もうしばらく見えない敵と共存します。

——

うめたに・のりこ　東京都杉並区にある「認定NPO法人ももの会」が運営する高齢者在宅サービスセンター「桃三ふれあいの家」施設長。「桃三ふれあいの家」は、TURN交流プログラム、TURNフェス5に参加。

21 コロナと言語

大崎晴地［アーティスト］

抗原は目に見えない。アドレスを持たない。世界地図の分布から死者の数で可視化される。人の死によって空気の分布が示される。これはテロに似た脅威だが、それよりも身近な空気が脅威に晒されている。極めてリアルなものでありながら情報によって特定されるという両義的なものだ。そこには人間が想像する隙間がない。

コロナウイルスは、実在的な数字であって想像を受け付けないようなところがある。

それでもこの間の自粛生活は物質化した人間の生を想像する好機でもある。

芸術は外部との接触や想像から生まれるところがあるが、人間とコロナウイルスはどう共生できるのだろうか。免疫的に「非自己」と特定されたとしても、それは人間にとって予定調和的な外部、医療的な意味での外部に過ぎない。それは公衆衛生的で無菌室な社会、自粛要請を後ろ盾する社会である。

そもそも自分の体内にもウイルスが寄生している。精神分析的に言えば、無意識は言語に感染している。すでにコミュニケーションの道具として役立っている。人間に棲みついた言語。コロナの疫学的解明はもちろん今後も続いていくが、コロナを芸術的な意味で深く考えることができるのが、この自粛期間なのだと思う。

——

おおさき・はるち　心と身体、発達のリハビリテーション、精神病理学の領野にかかわりながら作品制作、研究活動を行う。臨床心理士や障害児療育の分野での研究者との共同活動を実施。TURNフェス1-2に参加。

22 「3密」のないアートへ

小笠原新也［耳が聞こえない鑑賞人／徳島県立近代美術館 アートイベントサポーター］

コロナ禍の中にあって、去年のTURNフェス5を振り返ってみると、そこではまさに「3密」の中で、障碍（しょうがい）やLGBTを越えて新たなアートへの熱意、喜び、パワーが館内に渦巻いているのが肌で感じられた。

だからソーシャルディスタンスや自粛が国民全員に求められた時には、TURNフェスの熱さとは逆の暗黒時代に突進していくような不安、懸念を抱かずにはいられなかった。それは同時に、色んな方たちと接触もせずにアートを創り出し、アートを享受できるか？　という問題を突きつけられた。

しかし、現実では誰もがその問題に積極的に向き合っているように感じている。リモートやネットを通してアートに触れようとする動きが出てきたし、ドイツ政府に至っては「アーティストは必要不可欠であるだけでなく、生命維持に必要なのだ」とアートの意義を明確に断言した。

全世界中が苦境に陥る時に初めてアートは大きな力になり、大きな意味を持ってくることを身に染みて感じ入る。新しいライフスタイルが生まれつつあるように、コロナ禍が収まってきたら、新しいアートも生まれてくるだろう。メディアやテクノロジーを活用して「3密」には関わらないアートの可能性が、TURNに生まれてくることを信じている。

——

おがさわら・しんや　美術館や芸術祭などで、鑑賞案内人として活躍。生まれつき耳が聞こえない。TURNフェス5で、筆談での会話と鑑賞を楽しむガイドツアー企画のナビゲーターを担当。

23 不安のサウンドスケープの中で

小野龍一［音楽家］

当然、時代には固有のサウンドスケープが存在しています。僕はCOVID-19によって引き起こされた有事の中で、現代に生きる音楽家として周囲に耳をすましています。

その中で特に印象的なのが、ウイルスの感染拡大に伴い休業を余儀なくされた劇場、コンサートホール、ライブハウスに漂う長き沈黙です。沈黙は通常「音（イベント）の始まりで終わり、終わりから始まります。日常で僕たちが体験している、パフォーマンスが始まるまでの緊張に満ちた時間を仮に「期待の沈黙」と呼ぶとすれば、現在そこに漂っているのは始まりも終わりも定かでない「不安の沈黙」なのではないでしょうか。

緊急事態宣言（2020年4月7日）の後、多くの音楽家はサイバー・スペースへと活動の場を移行していきました。このことは生存（survive）を目的としたしなやかな反応として否定も賛成もしません。実際、2019年の時点で音楽鑑賞の9割がインターネットを介し行われているという統計が出ています『ライブ・エンタテインメント白書2019』。しかし、だからこそ、今こそ、自分たちが「暗黙の前提」としてきたライブ・スペースについて検証・捉え返すべき地点なのではないか。日本に限らず世界的に漂う「不安の沈黙」たち——「不安のサウンドスケープ」に耳をすましながら、このようなことを考えています。

——

おの・りゅういち　音楽作品の制作を主体に展示や舞台演出などの様々なジャンルを横断しながら聴取論の実践的な研究を行っている。TURNフェス4・5、エクアドルで開催されたTURN-LA TOLAに参加。

24 社会が変わって見えなかったものが見える

海部陽介［人類進化学者］

突然のパンデミックで、準備していた大事な企画の延期や中止など、今年の計画の大幅修正を迫られています。そんな心穏やかでない中、新たに気づかされたことがありました。

それは、社会を支えようと奮闘する多数の人たちの存在。医療現場をはじめとするエッセンシャル・ワーカーの皆様はもとより、困難に直面している立場の弱い方々を支えようとする種々の団体や、地方政治のリーダーたちの素顔は、これまであまり自分の目に触れていませんでした。見えないところで、こうやって社会が動いているんだなあと、思いを新たにしています。

さらに各国の考え方や動き方にも、興味深いことや学ぶことが多々ありますし、それらを伝える報道現場の工夫にも、今まで以上に目が行くようになりました。

総じて思うのは、「社会を動かすのは人」、「よくするのも悪くするのも人」、そして「よい社会を維持するには、努力とコミュニケーションが必要」ということでしょうか。

決して目新しい話ではないのですが、それを改めて実感できたことは、とても意味があると思っています。「やり続ければよくなる」という信念が、自分のこれからの行動に活力を与えてくれるので。

——

かいふ・ようすけ　東京大学総合研究博物館教授。原人からホモ・サピエンスに至る200万年のアジア人類史について研究。前職の国立科学博物館で「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」を実施。『TURN JOURNAL SPRING 2020 — ISSUE 03』にて白比野克彦と対談。

25 また世界と出会い、つながりなおすために

角銅真実［音楽家］

2020年5月22日の記録

まず、医療従事者の方々、そしてこの期間もずっと世の中を動かしてくださっている方々に心から感謝をしています。

今この時点で感じていることを全部言葉にするのはとても難しいですが、これまでは、毎日違う場所へ出かけて、違う人に会い、様々な〝リアクション〟の中からものを考えたり制作することの多い生活だったのが、家という定点を伴って生活することになり、様々な発見がありました。

例えば、生きているって、一日でこのくらいの量のゴミを出しているってことなのか！　と改めて気づいたり。いろんな国の知り合いと連絡を取ることからはじまって、改めて今日に至るまでの世界の歴史や、日本の歴史、生物のしくみを学びなおしてみることで、大きな流れでものを感じたり、考えることがより多くなりました。

自分の生きる態度に関しても、これまではこの世に一人でポツンと浮いている意識が割と強かったのが、今、様々な歴史や文化に〝つながりなおす／入りなおす〟ような意識の中にいます。音楽も、ゆっくりと全身であじわうように聴く時間ができました。外へ向かってリアクションすることの一歩手前の、自己の中に広がるものを注視して、少しずつ広げるように日々を過ごしています。

次に外へ出ていったとき、自分はどんな音を鳴らすかな。

外からはどんな音が聴こえるだろう。

ちょっと期待しながらそんなことを考えちゃったりもしますが、それはそのときにわかることだよな〜、ということで、そういった答えもあまり出そうともしていません。

あ〜、今、TURN交流先の「たまりば」の皆さんはどういう風に過ごしているかな〜と、楽しみ上手な何人かの顔や声を思い出していました。元気だといいな。

また世界と出会い、そしてつながりなおすために、今は自分の中のひみつを増やすことを楽しんでいます。

——

かくどう・まなみ　自身の声、打楽器、言葉、身の回りのあらゆるものを用い、様々な録音への参加、ダンスや映像作品、CM音楽等、自由な表現活動を国内外で展開。TURN交流プログラム、TURNフェス1〜3に参加。

26 身体なき対話の可能性

梶谷真司［哲学者］

哲学対話というのは、共同の思考の場である。一つの場所で丸くなって座り、お互いに問いかけ、考えたことを言葉にして、耳を傾ける。気楽なおしゃべりでも、自分の意見を主張する議論でも、結論を出す話し合いでもない。ただ共に考えるための場。そこでは身体的に空間を共有することが重要だ。対話はとても身体的な行為だからだ。

いま、オンラインでしかつながれなくなって、哲学対話はまともにできなくなるのではないかと心配する人は多かった。オンラインでもできるが、それはあくまで〝仕方なく〟であって、本物はそうじゃない、と。

しかしいざやってみると、意外にいい。哲学対話ではみんなが〝フラットに〟話せることを大切にするが、PCの画面上では文字とおりフラット＝平らだ。しかも全員が同じ大きさの四角の中に納まり、お互いが同じく正面から向き合っている。リアルな空間では実現不可能な、完全な平等である。

生身の空間だと、それぞれに存在感があり、それは時に圧迫であり緊張を引き起こす。PC上ではそれがない。みんな等しく存在感が薄い。そのせいか、対話をしている時、純粋に考えることに集中できるようなところがある。哲学対話では、一緒に考える一体感が重要だが、同時に一人で思考に沈潜する孤独感も特徴である。オンラインだと、この孤独感が純化される。

以前から、哲学対話から二つのものを取り去ればいかと思っていた。一つは言葉、もう一つは身体である。それができれば、つまり、言葉からも身体からも解放されれば、対話の可能性は一気に広がる。今回、社会全体が物理的に一緒にいられなくなったおかげで、少なくとも身体的条件がそれほど絶対的ではないことが分かった。それが何を意味するのかは、これから見極めていきたい。

——

かじたに・しんじ　東京大学大学院総合文化研究科教授。専門は哲学、医療史、比較文化。多様な立場の人たちが「このテーマについて自由に語り合う「哲学対話」を実践。TURNフェス5に参加、第8回TURNミーティングに登場。

27 そこに居て、静かに共鳴すること

川瀬一絵［写真家］

2020年の春、私は自宅と自宅の庭で過ごしていました。

その庭はかつては夫の祖父母が愛でていた庭です。一度更地になる計画のもとに掘り返されたことがあるそうですが、土の中に残っていた根や新たに運ばれてきた種が、春にはめきめきと緑を茂らせていきます。

「この庭の植物や虫の生態を活かしながら整えるにはどう手を入れていったら良いか」。私は庭を眺めているのか、途方に暮れているのか、その両方かみたいな感覚で毎日長い間、日々成長する庭を見つめていました。

すると途中から「考える」ということをしておらず、気持ち良くそこに溶け込んでいるような感覚になっていきます。はっと我に返って「何しているんだろう」「はやく判断しなければ」と自分を律しそうになりますが、「今はいいか、時間もある」と身を委ねていました。

そしてふと思いました。人という生き物は自分を律することで「自分」を保持しているのかもしれないけれど、こういう時間を持つことは、人が生き物として、また生き物たちの一部として在るために備わっている性分であり、能力なのではないか。だから、この溶け込んでいるような時間の意義はもっと認められて良いのでは？　と。

そうやってぼーっとした時間を許していると、人間社会には、社会に「自分」として一役投じなければ、まるで生きることではないと否定されるほどの呪縛があるようにも思えました。

しかしその感覚に親しんだ数時間後に、ちょっとした仕事に取り組んだときに自分の判断力の鈍さにイライラしてしまったことも事実です。自分の中でもこのモードの違いはあまりにも別々で、認め合うには力がいりそうに思いました。

この価値観は、再び社会が動き出してそこに乗ってしまえば薄れていくかもしれません。だからこの場をお借りして記しておくことにしました。この文章を仕上げている今日は、新型コロナウイルスによる全国での緊急事態宣言が解除となってから7日目。活発に行動を始める人々を見ていると案の定、自信がなくなってきます。でもやはり、あの濃密な時間を怠惰や無意味と片付けるのには「ちょっと待った」と思うのです。

居ること、在ること、とある時間や場所を過ごすこと。そして静かに共鳴することで救われていることがある。見失いがちなこの事実を必要として認識することは、これからの時代の豊かさの鍵になり得るかもしれません。

——

かわせ・かずえ　テーマを定めずに衝動的に写真を撮り、それらを編集しながら衝動の訴え探るような作品づくりを行う。東京昭島市にある「社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンター」に通い、近年は同法人が運営する「グループホームフラワー」でメンバーの暮らしの様子を撮影している。TURNフェス4〜5に参加。

28 「リターン」しない

北澤潤［美術家］

インドネシアにある自宅で、大使館や航空会社、隣国の状況を調べつつ、（日本へ）戻るか戻らないかの判断が迫りつつあったのが3月頭ぐらい。その後、戻ることもできなくなったが、戻らないことを選んだ。そして数ヶ月。何が変わっただろうか？

詰め込んだ予定とタスクの消化、移動・往復の連続、目の前のプロジェクトへの盲進。これらの中断。すなわち、「やるべきこと」の喪失か？　もちろんこれは、変化の断片にすぎない。が、東京をベースにしていた頃、たしかに私はそんな選ばれし「すべき」優先の生活を送っていた。

こっちでは、すべてがやるべきことだ。優劣はない。予期せず生じた、何の意味も無いように思われる時間をうまく過ごすことが、仕事をこなす技術より実際に重要だったりする。スコールが降れば、ミーティングが数時間後になることもあるし、たまに延期や中止にもなる。「非常事態」はいつものことなのだ。

あえてこの観点だけからみれば、今回の事態で私は大して「変わってない」。東京を離れてインドネシアに来た時点で、とっくに変化を余儀なくされたからだ。

変わった気がするのは、私たちが日常によってつくられてしまっていたのを意識できた証だ。日常を自らつくっているつもりでいたが、実はつくられていた。これが何より怖い。

意識できた今、戻る必要はない。戻るつもりはない。どうやって「自らつくる」のか、変わらず足掻き続けていくほかない。

——

きたざわ・じゅん　「合同会社北澤潤八雲事務所」（東京）、「STUDIO BELIMBING」（ジョグジャカルタ）代表。フィールドワークを通して「ありえるはずの社会」の姿を構想・実現を芸術実践として試みる。TURNフェス1に参加。

29 May. 2020

加藤甫［写真家］

「オランダへようこそ」というダウン症の子を持つ親の間では有名なエッセイがあります（エミリー・パール・キングスレイ、1987年）。最近ではテレビドラマでも紹介されたそうですね。イタリア旅行へ行く準備をして飛行機に乗ったのに、降りてみるとそこはオランダだったという話です。

2020年の春、僕は新しく立ち上げるプロジェクトのことばかり考えていました。それは異なる人とのコミュニケーションの在り方について考えなおすスタディ・プログラム。タイトルは「共在する身体と思考を巡って」です。

——

かとう・はじめ　フリーランスとして様々な媒体での撮影のほか、アーティストやミュージシャン、アートプロジェクトのドキュメントを各地で行う。TURNフェス5の写真撮影担当。

30 今こそ「原田知世方式」を。

木ノ戸昌幸［NPO法人スウィング 理事長］

コロナ禍に右往左往していたあるとき、絵本作家・五味太郎さんの「じゃあ、コロナ前がよかったのか？　戻りたいのか？」という問いに出会い、ハッとしました。

様々な事柄が予定通りに進まず、焦ることも多い日々。でも「やりたいこと」や「やるべきこと」が個人的にも組織としても、これまで身の丈を超えて過剰であったことに気づいたのです。無理をせず欲張らず、できることをできる範囲で丁寧にやってゆきたい。だからもう、以前のような状況には戻りたくない！　……じゃあ、どうしたらいいのか？

そこで思い至ったのが長いキャリアを持つ女優であり、歌手でもある原田知世さんです。彼女はそれほど露出が多いわけではないのに不思議とその存在感やきらめきは衰えません。きっとものすごく丁寧に仕事を選んでいて、働き方や生き方がシンプルで、自然体なんだろうなあと想像（妄想？）します。

上へ上への上昇志向の中では、「忙しい、忙しい」と愚痴りながらも増やし、大きくすることのほうが実は簡単で、減らしたり断ったり、小さくとどまることのほうが難しいもの。選ぶ、シンプル、自然体。この3つを柱とした「原田知世方式」こそ、このコロナ禍の中で得たこれからを生きるための指針です。

——

きのと・まさゆき　京都府京都市にある、既存の仕事観や芸術観に疑問符を投げかけながら活動している福祉事業所を運営するNPO法人の理事長。「スウィング」は、TURN交流プログラムに参加。

特別寄稿①

新型コロナウイルス感染拡大のずっと以前から、世界中に差別や偏見は存在している。私たちは当事者であるにもかかわらず、それらの問題と距離を保ってきた。今、理性を持って自覚的に向き合う視点が必要とされている。多様性のある社会に向けた、コロナ後の世界への提言。

監獄化する世界の中で
―あるいは距離の遠さと近さについて

藤原辰史
［歴史学者／農業思想史・農業環境史］

―

▽自省能力の劣化

―

私たちは目をつぶるのが得意です。耳をふさぐのも、口をつぐむのも得意です。目と耳と口というのは身体的な部位を指すのではありません。心の開かれ方のことです。開かれた目、耳、口は自省を促します。自省が他者との向き合い方の変化を促します。が、日本のみならず世界各国のとりわけ先進国と言われる国の自省能力の劣化はいま止まることを知りません。国境なき記者団が発表する世界報道の自由度ランキングでは日本は66位、G7で最悪で、「顕著な問題」があると指摘されています。もちろん、これは一つの団体の指標だと無視することもできるでしょうが、ドイツに合計で2年近く住んだ印象からしても、日本の報道にはあまりにも自国の負の遺産についてのタブーが多く、読者や政府からの批判を恐れすぎていて、縮こまっています。「あいちトリエンナーレ2019」で明らかにされたように、日本の為政者は表現の自由と知る権利を制限しても、新しい文化とか芸術とかを発展できると誤解してきたことが明るみになりました。

「新しい生活様式」。人と社会的に距離を取って暮らしなさい。そこのどこが「新しい」のでしょうか。古くてたっぷりホコリのかぶった様式としか思えません。ずっと私たちは社会的に人と必要以上に距離を取って生きてきたのではないでしょうか。身体障害も動きやすい歩行者天国やベンチや広場を作るよりも、日本はどうして、人と触れ合わない車道ばかりを優先的に開発してきたのでしょうか。精神障害者を私たちはどこに隔離してきたのでしょうか。何に対して私たちの心はつぶり、ふさぎ、つぐんできたのでしょうか。

―

▽ずっと封鎖され人権侵害されてきた

―

第一に、今回の新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、都市が封鎖され、食料と燃料と水が行き渡らなくなり、医療崩壊や複合災害が起こることが警戒されたし、現に起こったけれども、コロナ以前からずっとそのようなところがありました。そこは隠蔽されてきました。典型的なのはパレスチナのガザ地区です。イスラエルはナチスの暴力に追われるようにして逃げてきたユダヤ教徒たちによって建国されましたが、国際法違反と認定されているにもかかわらず、パレスチナの人びとを暴力で追い払い、無数の難民を出して領土を拡張してきました。

そして、長さ50キロメートル、幅5~8キロメートルの狭い場所に190万人が住む人口密度の稠密な場所が軍事封鎖され、壁で包囲し、銃を持った兵士を立たせ、食料品も水も医療品も行き渡らせないようにし、電気も一日12時間止まるようにしました。もう15年も封鎖されたガザに、イスラエル軍は何度も侵攻し、空爆し、空港を破壊してきました。たとえば、2014年の夏、51日間にわたりイスラエル軍が攻撃をした中で、なんと2251人が亡くなり、こどもも551人も亡くなりました。「世界最大の監獄」と言われる理由です。

もちろん、ガザに住む人たちもささやかですが応戦します。日本の人たちはしばしば暴力はいけない、どちらも武器を捨てて平和になってほしい、という相対主義でものを考えます。しかし、この見方は中立的ではありません。両論併記病の報道に徹底的に欠けているのは、軍事力、経済力、政治力の非均衡を前提にしても、そもそも両論は同じ地平に置かれているのか、ということです。どちらがその三つのすべての力を持っているのか、それは、明らかな事実なのです。

この問題は日本と無関係ではありません。安倍首相は、2014年5月にパレスチナではなくイスラエルを訪問し、12日に包括的パートナーシップの構築に関する共同声明を出しました。たしかに、そこで「両国の防衛協力の重要性を確認し、閣僚級を含む両国の防衛当局間の交流拡大で一致した。双方は、自衛隊幹部のイスラエル訪問で一致した」とあるように事前的な協力を約束し、あの51日間の軍事攻撃のあと、11月にはサイバーセキュリティに関する協議の場を設けてイスラエルからの技術提供について話し合わせています。

それでも社会的に「距離」を感じるのであれば、2018年の8月に神奈川県川崎市で2014年の攻撃のための武器を生産していた兵器産業たちが集結する「イスラエル軍事見本市」が開催されたことはご存知でしょうか。ここにはパレスチナを攻撃するための武器だけではなく、東京五輪のためのセキュリティの技術も展示されていたのです。ガザへの攻撃は軍需産業にとって宣伝になるわけです。では、この武器は誰が買うのでしょうか。もちろん、私たち納税者であり、主権者です。

新型コロナウイルスの危機の中でガザはどうなっているのでしょうか。医療体制がすでに崩壊しているので、感染者が増えると大惨事になるため必死で水際作戦を敷いている。皮肉にも封鎖されているのまり、中国政府が実施した武漢封鎖の15年も前から都市が封鎖され、人権侵害が起こっていたのです。

―

▽家・監獄・強固な差別の仕組み

―

第二に、家の密室空間に閉ざされて、ストレスがたまったとか、酒量が増えたとか、満員電車から解放されたとか、いろいろな変化がありました。けれども、新型コロナウイルスが蔓延するずっと前から、家庭内暴力によって家が監獄のような空間である人たちはたくさんいた。こどもの貧困者の割合では先進国で最低レベルの日本という国は、いうまでもなく給食が命綱であることもたちも多数いました。それ以上に「ホーム」を持たない人びとが世界中にいました。ステイホームという言葉の欺瞞が、おそくこの世界を眺め直すときの基準になるという意味で、新型コロナウイルスの意味は少なくなかったと思います。あまりにも民営化して小型化した各国政府は福祉も教育も多くのことを家庭に押し付けすぎてきたことを、今こそ考え直さなければなりません。

しかし、話はここで終わりません。閉じ込められる空間は家だけだったのでしょうか。当然そうではない。世界は今、巨大な監獄国家ブームです。アメリカでは、黒人やヒスパニックの人びとが人種主義に対して、つまり数百年にわたって築かれてきた構造的な差別と暴力に対する抵抗運動を起こすたびに、逮捕された大量の人びとが監獄に送り込まれますが、その監獄の多くは民営であり、企業への安価な労働力を提供するという監獄ビジネスの利鞘を提供しました。

世界各地で、支配的地位にある人間集団よりも、そうではない人間集団の方が感染率が高いことが明らかにされました。後者は在宅できない社会や生命維持のメンテナンスの仕事に従事しているから。人種主義とは構造的問題、つまり、関心がない人がいればいるほど回転しやすい仕組みの問題なのです。ちょうど、ニュー・メキシコ州のトリニティ実験場で人類史上最初の原爆実験のとき、爆心地から最も距離が近いところで待機させられたのは、白人兵士ではなく、黒人兵士だったことを、写真家の豊崎博光さんは『アトミック・エイジ―地球被曝はじまりの半世紀』（築地書館、1995年）の中で指摘しておられますが、このような仕組みは、支配者側にいる人の関心が薄ければ薄いほど、全自動で差別を恒常化するのです。

―

▽遠くの存在――「非寛容精神」と「非人間性」

―

日本は「単一民族」で人種問題とは無関係であるという程度の認識の人が今もなお政府の中枢にいることに私はいつも衝撃を覚えます。日本はアイヌ民族や琉球民族などさまざまな民族を軍事力で征服して成り立った国家であるばかりではなく、税金を納めている在日コリアンを含める在日外国人に対して、ずっと選挙権を認めずにきた国家である事実からもずっと「日本人」は距離を取ってきました。

また、茨城県の牛久や長崎県の大村にある入国管理センターでは、待遇のひどさゆえにハンガーストライキを実行する人びとや、自殺者も出ています。大村ではハンガーストライキを続けていた40歳代のナイジェリア人男性が餓死する事件が起き、クルド人の迫害が続くトルコから亡命した男性に対して、牛久で職員たちに手足を抑えられた映像も見ることができます。もっずっと前から、日本にも「封鎖」がありそこに「非寛容精神」と「非人間性」が存在していたのに、この事実に対し社会的に距離を置いてきた。日本は、在留外国人が300万人、外国人労働者が160万人程度住んでいる多元国家であることを認識し直さなければ、いつまでも「日本人」という自画像にうっとりして、自分の目と耳と口を外へ「開く」ことを忘れてしまいます。

＊

ポストコロナの世界というと、何か新しいことが起こる予感がしますが、それは、私たち「を」変えてくれる何かでは全くありません。私たち「が」この全自動差別産出機を分解し、正反対の仕組みを作り出すのでなければ、端的に言ってつまらないし、ホコリのかぶった古い「生活様式」に戻るだけです。いうまでもなく、そこにはどんな新しい文化も生まれません。

―

参考文献
＊岡真理『ガザに地下鉄が走る日』みすず書房、2018年
＊イラン・パペ『パレスチナの民族浄化 イスラエル建国の暴力』田浪亜央江・早尾貴紀訳、法政大学出版局、2017年

ふじはら・たつし　京都大学人文科学研究所准教授。専門は農業史、食の思想史。著書に『分解の哲学―腐敗と発酵をめぐる思考』（青土社、2019年）、『給食の歴史』（岩波新書、2018年）、『戦争と農業』（集英社インターナショナル新書、2017年）、『トラクターの世界史―人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち』（中公新書、2017年）、『決定版 ナチスのキッチン―「食べること」の環境史』（共和国、2016年）、『カブラの冬』（人文書院、2011年）、共編に『現代の起点　第一次世界大戦』（全4巻、岩波書店、2014年）等がある。

31　夢のあと~さき

久保田翠
［認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ 代表理事］

コロナだろうが何だろうが、「クリエイティブサポートレッツ」の運営する障害福祉施設「アルス・ノヴァ」は運営しています。それは「来るところがなくなったら困る」人たちが通っているからです。「いつもの日常」の変更が難しかったり、家族や一人では生活がままならない人たちだからです。

自分を守り人に感染させないために出かけないことが強いられています。その中で、医療や福祉や流通関係者は不休の活動です。

「レッツ」は20年間居場所を作り続けてきました。それは、人が生きる上で、家族や職場ではない居場所が必要だから。重度の障害のある人たちは誰かに支えられないと生きていけない人たちですが、だからこそ、人と人がともに生きることを指し示してくれています。

TURNの活動は始まったばかり。これから人々が分断や災害、罹患、不安の時代の中で「人がともに生きる」ための術を多様に編み出すプラットフォームになることを期待しています。

―

32　障害のある人にもテレワークを！

黒澤英明
［り mix studio とら（リミックス スタジオトラ）管理者・サービス管理責任者］

社会福祉法人を退職し、準備していた新しい障害のある人が働く場が2020年3月31日に認可され、4月1日よりオープン予定でした。

既存の事業所では利用者さんの作業収入や、生活リズムを守るための運営という判断があったと思いますが、私たちはこれから利用者さんを募るという段階でしたので、見学や体験、実習もキャンセル。とにかく新型コロナウイルスの収束を願い6名のスタッフとともに活動を自粛していました。

「立ち上げたばかり」というのは多くの助成制度の隙間となってしまい、正直収入や運営は厳しいですが、自分たちにできることを考え、①スタッフとスタッフのお母さんがつくった布製マスクの全国無料配布、②地域のみなさんに使っていただけるテイクアウト・デリバリー告知デザインの作成、③地域のみなさんとの交流会議、④星野源さんの「こちで踊ろう」コラボなどをおこないました。

当事業所は音楽やデザインを主な作業内容としていますが、以前より「障害のある人のテレワーク」を掲げており、電車に乗ることや、家から出ることが難しい利用者さんへのクラウドソーシングなどによる仕事の形を模索しています。

6月より少しずつ活動を再開していますので、利用、見学希望などございましたらぜひご連絡ください。みなさんとまたお会いできることを楽しみにしています！

―

「り mix studio とら」での活動の様子

33　富士清掃サービスの日常より　Kさん

［富士清掃サービスメンバー］（イラスト）

ふじせいそうさーびす「富士清掃サービス」は、東京都町田市にある就労継続支援B型事業所。公園や病院など多くの施設でワックスがけや浴槽・トイレ等の清掃を行う。TURN交流プログラムに参加。

干支のねずみたちが、割れたティーポットの中から出てきて清掃をしているところだそうです。今年、予期せぬ未曾有の事態となりました。「富士清掃サービス」はそんな中でも、休まず、ひるまず、活動を続けています。

34　こどもたち

小林エリカ［作家・漫画家］

こばやし・えりか　著書は『トリニティ、トリニティ、トリニティ』『マダム・キュリーと朝食』（共に集英社、「放射能」の科学史を巡るコミック『光の子ども』1~3巻、実父とアンネ・フランクの日記をモチーフにした『親愛なるキティーたちへ』（共にリトルモア）他。『TURN JOURNAL SPRING 2020 — ISSUE 03』の表紙ドローイングを担当

35　散歩力を高める日常の実践

小林 空
［OTON GLASS / FabBiotope メンバー］

人に会う、遠くへ旅をする、移動中の景色を眺める、など、今までいつの間にか心を満たしていた活動をすることが難しくなってしまった。しかし同時に、身の回りの見慣れた風景に目を向けるいい機会になるのではないかと思い、自宅付近を散歩し、気になった物体や状況を写真に収め、文章化して現地報告するという日課を始めている。

これまで、遠くの見知らぬものへの期待が、生きるためのエネルギーに変換されていた。遠くに行けない今、このエネルギーを得るために、自宅半径1kmでこれまで見過ごしていた些細なまちなかの状況を記録し、「散歩力」を高めてみる。変容した社会に対する自らの構え方を模索できるのではないかと思い、そういった日常の実践を始めている。

意識的に歩けば、見過ごしていたであろう不自然で奇跡的な状況に出くわす。例えば、積み上げて整理された壊れたカラーコーン、倒れないように無造作に紐で支えられた軒先の華奢な草木など…。

まちなかの人々の即興的な工夫やフラジャイル（脆い）な状況を採集し記録していくと、ひっくり返して街の裏側を見ている感覚になる。採集した風景は、誰かが見たらなんでもないような風景だが、次第と愛着が湧いてくる。日々の活動が変容した社会で、自分の中に潜る日常的実践が自分の外への眼差しや身体を変えていく。突然ぽっかりできた時間的空白が、世界を味わう時間を与えてくれているように思う。

散歩をしつつ写真を撮る。最初は何を撮ったらいいのか、わからない。自分が撮る撮らないを決めている興味の壁はなんだろう。自問自答しながら、実践の最初はそんな感じだった。動きが少し遅くなった街と時間の中で、自分の興味を自ら探るのに、街、都市という対象はちょうどいい。普段、見ていないようで見ているもの／見ているようで見ていないもの、その境界線を行き来しながら、都市の裏側をめくり返すようなビューを探し続ける。

［1］

［1］そもそも、カラーコーンが折れる瞬間というのを見たことがない。機能を削がれた折れたコーンは管理人によって重しと分けて綺麗に整頓されようとしたが、管理人の気配りで風で飛ばないように重しが一つ載せられた。

［2］

［2］幹の細い植栽をどうにか立たせようと、紐で操り人形のように枝葉が支えられている。ついには電信柱の公共物にまで拡張しているその紐は、持ち主の介入の結果というより枝の延長として植物の思考のように見えてくる。

―

こばやし・そら「OTON GLASS/FabBiotope（オトングラス／ファブビオトープ）」は、目にかけて文字を見るとその文字を読み上げる眼鏡を開発したプロジェクトチーム。TURNフェスに参加。

36 ピンチがチャンス

小山田徹［美術家］

東日本大震災でも思っていた事。日本が、世界が変われるチャンスだと思っていました。たくさんの悲しみと痛みの上で、社会が大きく転換し、新たな価値観の創造が可能になるんじゃないか？　でも、社会は変わりませんでした。経済至上主義、消費社会、競争社会と効率優先、格差、利己的な社会、ほとんど変わりませんでした。歪みは増すばかりの世の中でした。そして今回、全世界に波及する未曾有の事態。さあ、世界は大きく変化するのでしょうか？

私は長らく、「濃厚接触」を社会に埋め込む事を活動の中心において、様々な試みをおこなってきました。しかし「濃厚接触」は回避しなければならない事態になってしまいました。社会も、今まで表に出なかった「歪み」が色々と可視化される事になり、多くの人々がその問題と向き合う事となりました。ある意味リアリティが生まれたのです。そう、ピンチがチャンスです。この等しく人々にふりかかったリアリティは、何かを動かすエネルギー、梃子になるのではないか。不謹慎ながらワクワクしているのです。皆がある種の不可能性を経験する事。実はとても重要な事なのです。不可能性の可能性。「濃厚接触」の回避から「心の濃厚接触」の創造へ。どんなアイデアと実践が生まれてくるのか、ワクワクです。

——

こやまだ・とおる　京都市立芸術大学教授。コミュニティ、場の創生、共有空間の開発を主軸にプロジェクトを展開。1998年までパフォーマンスグループ「ダムタイプ」の舞台美術・監督を担当。TURNフェス1-5に参加。『TURN JOURNAL SPRING 2020 — ISSUE 03』にエッセイ寄稿。

37 今、思うこと

近藤博子［気まぐれ八百屋だんだん 店主］

今、感じていること。

人の動きが止められ、社会の動きが制限された。

不便さの中にいきなり放り出された私たちは、今までの便利さは当たり前のものではなかったこと、全ての人にとっての便利さではなかったことに気が付いたのではないだろうか。様々な理由で、外に出られない日々を送ってきた人たちに想いを馳せることが出来たのではないだろうか。

ネット会議を含めた、近き将来に実現すると思っていたことが一気に動き始めた。だが、それも全ての人にとって便利であるわけではないとすぐに気付いたはずだ。

同時に不自由さも感じた。便利さも不便さも、自由さも不自由さも塩梅良くまじりあっているのが丁度良いと改めて感じている。そうでなければ、全ての人が心地よく生きられない。今を受け入れ、人を大事にし、じっくりと考えながら日々の暮しを大切にしていくことが求められていくような気がする。その中に、忘れていた文化的な営みを再発見していけると思う。

38 新しい生活様式とは？

齊藤果［みかんの木 児童発達支援管理責任者］

勤務現場は心身に障害のあるこどもたちを受け入れている「放課後等デイサービス」です。

「所謂」、重度身体障害児…、基礎疾患を持っています。

そして、私自身免疫疾患者！

社会的背景によって不安、恐怖が続く日々。命をかけて利用するこどもたち、命をかけて働くスタッフ。決して大袈裟な表現ではありません。追討ちをかけるように求められる福祉現場への専門性。

貴方たちは何をみているの？　と問いたい！

より良く生きるための意識の変化、意識の転換。

それが新しい生活様式なのでしょうか…。

新型コロナウイルスがささやかれ始めてから今現在もなお、不安と恐怖に向きあう毎日。何も変わりありません。

しかし、密閉された小さな社会の内であっても、「笑顔」、「快哉」、「癒」三つ！

それは、とても素敵な空間です。

可能性をみつけました。

「共感しあえるこどもたちへ」

この空間でしか経験できない事を、施設に来られないこどもたち全てに、封筒いっぱいにつめこみ送りました。

経験を共感しあえたこどもたちが、元気に戻って来る事を願わずにはいられません。

——

さいとう・このみ　東京都杉並区にある、放課後等デイサービスを運営を行う、知的障害児・肢体不自由児の混合施設に勤務。「みかんの木」は、TURN交流プログラム、TURNフェス5に参加。

39 私たちがつくる〝新しい生活様式〟を

斉藤由子［上町工房 施設長］

「皆が急に手洗い、手洗いって言ってくる」「マスクは嫌だって言ってるのに！」「BOOK・OFFも開いない…」「誕生会は？」「え？　上町工房も行かなくてもいいって何？　いつまで？？」等々。

皆さんの思いはこんな感じではないでしょうか。

分からないなりにも色々と情報収集をし、何となく理屈をつけて納得しようとする自分でも、「何だこれは?!」と思うような今。理屈で理解するのではなく、経験を通して少しずつ自分たちの解釈をつくっていくような、知的に障害のある方たちにとっての「何だこれは?!」のはずです。

この状況は、かなりの

しかし、そんな納得がいかないようなことでも、一生懸命に状況を受け止めようとしたり、応じようとしたりする姿は、まさに知的障害のある方の強み、邪気のなさ、寛容さなのではと改めて気づかされます。押圧ではなく、この人がそう言うから合わせてみようか、と思ってくださるような、日頃からの和やかな関係性を築くことの大切さも同時に思うところです。

難しくて到底できないと思っていたことにも少しずつ慣れていかれるような姿からは、私たち伝える方の配慮や工夫、努力の必要性と共に、皆さんの持つしなやかさ、力を感じさせてもらっています。

さあ、そうなると、そんな風に私たちに合わせてくれている皆さんに対して、私たちだって当たり前にもっと皆さんの分かり方、感じ方に合わせていくことも必要なのではないでしょうか。〝新しい生活様式〟だってきっとそう。皆が一律に、同じように できる訳ではない。それぞれに合わせて、という捉え方が抜け落ちないようにしなくては、と思います。

この騒動によって進んだ、様々なオンラインサービス、リモートワーク・学習、デリバリーなどは多様な生活スタイルにも繋がってくるはず。新たな価値観が生まれてくるような今、これを何とかチャンスにしていけるように——。

皆が同じ状況で過ごしているのではないという認識が広がることで、皆がお互いの違いも認めていくような、障害特性への配慮も当たり前になるような〝新しい生活様式〟を描きたいと思っています。

40 自由気ままに暮らしていく

佐久間洋子［看護師］

その具体例を、事例をたくさんつくっていけるよう、まずは、配慮が必要な方の身近にいる私たちが、前向きに、建設的に、粛々と。柔軟な、自由な発想で、皆で知恵を絞り、発信をしていければなー、と思う今です。

——

さいとう・ゆうこ　東京都世田谷区にある、一人ひとりの持ち味の発揮を大切に活動している就労継続支援B型事業所の施設長。「上町工房」は、TURN交流プログラムに参加。

「ナースさくまの家」は、病気があり、また様々な事情を抱えている人たちが入ってきます。ほとんどが高齢者です。5月に緊急で1人受け入れて5月後半に3人の方を看取りました。

コロナで、何が変えなくてはいけないのだろうか。毎日毎日の共同生活のなかみについて。看取りは、コロナは関係なくて、1人は老衰とあと人は癌でした。食事やお風呂、トイレの介助、おしゃべり、肩を抱いたり笑顔になったり。

自由気ままに時間が流れることがいいなぁ。

自分のことを大切に思う気持ちと相手を大切に思う気持ちで、なんとかならないかな。

体調を整えて、手洗い、うがい、マスクはつけるけど、大事な時は外しちゃう。手すりやドアノブの消毒でウイルスも叩くけど、こちらの体もなんだか弱る。そんなに目新しいことはない。

こちら、「さくまの家」の大事なものは、自由気ままに暮していく。ダメですかねー。何か変えたほうがいいですかね。

あっ、課題とか問題点でした。

コロナウイルスより強大なものが必ず出てくる気がするので。

仲間とお酒飲んで、ゆっくり考えます！

だって騒ぐの嫌なんだもの。

——

さくま・ようこ　病院、訪問看護ステーション、老人保健施設、特別養護老人ホーム等の勤務を経て東京都三鷹市で民家を借りて医療対応型シェアハウス「ナースさくまの家」をスタート。「ナースさくまの家」は、TURN交流プログラムに参加。

41 のっぺらぼう〜マスク星人との闘いの巻き

Sasa/Marie［サイン・ポエット（手話の詩人）］

のっぺらぼうに押しつぶされる
のっぺらぼうから目玉がぎょろり
口もなければ手もないよ

おそとはこわい
となりはとおい
ぽつんとひとり
のっぺらぼう

のっぺらぼうにかこまれて
またふりかえる
かたごしの
のびてくる手をふりはらい

てさぐりめさぐり
のっぺらぼう
しろいおもてのむこうには
なにがある

なにかある

みえ（て）いるものと
みえ（て）ないものが
一眼となり（て）
のりこえ（て）
たえ（て）

とうとうと流れのなかに

といかけ（て）
こたえ（て）
ゆれ（て）
き（て）
（て）
○
・
○
（　）
（　）をつなぐ
（　）のぬくもり
（　）をかんじる

——

ささ）まリー「Read taste music.（リード・テイスト・ミュージック）」総括。聞こえると聞こえないのあわいに生きている。手話や日本語などによる狭間の表現を追求。TURNフェス4に参加。

42 東京から離れた生活を、東京で

佐藤慎也［建築家］

家族とこんなに長い時間を自宅で過ごしたことはありませんでした。勤務先の大学の授業はすべてオンラインとなり、これまで以上に準備の時間が必要となります。さまざまな会議もオンラインとなり、これまでよりも議論に時間が掛かっています。その意味では、働いている時間はこれまでとそれほど変わっていないのかもしれません。

それでも、この生活にもっとも近い日々だったと思い出すのは、15年近く前、ドイツの美術館で研究のために1年間滞在したときのことです。17時にはみんな仕事を終えてしまうドイツのゆったりとした時間のなかで家族と暮らしたことが、オンラインで働きながらも多くの時間を家族とともに過ごす今と重なります。

「バカンスみたいなもんです」

久しぶりに行ったオンラインゼミで、ある学生が言った一言。大変なひとも大勢いるなかで、呑気な発言に思えるかもしれませんが、確かにこの日々を正確にあらわしているように思えました。

バカンスのように、東京から離れた生活を、東京のなかで送る。また、すぐに忘れてしまいそうですが、そんな日々を過ごしているのかもしれないと考えています。そのときに、ドイツで暮らしていたときに感じていた物足りなさのことも、同時に考えています。

——

さとう・しんや　日本大学理工学部建築学科教授。アートプロジェクトの構造設計、ツアー型作品の制作協力、まちなか演劇作品のドラマトゥルグなど、建築にとどまらず、美術、演劇作品制作にも参加。TURNフェスに参加。

43 直接、人と触れ合うことの重要性の再認識

佐藤真人［NPO法人ぐんま若者応援ネット アリスの広場 代表］

可能性…直接、人と触れ合う事の重要性の再認識。

問題点…ネットを介した「コミュニケーションだと、声と表情だけで細かなニュアンス、全体的な雰囲気が分からない・伝わらない。

2014年から不登校やこもりがちな若者の居場所となっているアリスの広場も、例外なくコロナの影響を受けています。

そんな中、外出自粛でストレスがたまる、というニュースについて若者が、「俺たちは何年家にいたと思ってるんだ」と言って思わず笑いました。僕自身も実はあまり苦に感じていません。不登校の子にとっても引け目を感じることなく休めるので、実は気が楽だったりします。

コミュニケーションを取るだけならWebでも出来ます。でも、「アリスの広場」はコミュニケーションの場だけではありません。こうした場はここに行くだけでも、外に出て、他人と接する練習になっているのです。

生物にオス・メスがあるのは、急な環境変化で絶滅を避けてきた結果です。なぜこう思うかといえば、家に長くいる事が苦痛な人とそうでない自分たちがいるからです。不登校や引きこもりは一般的には良くない事とされていますが、TURNした今の時代にはむしろ合っているのでは、とも感じていて、生物はうまくできているなと感じます。

——

さとう・まこと　自らの経験をもとに、不登校やひきこもりの若者が家から一歩外へ踏み出すことを目的に、好きな時に訪れて、安心して自由に過ごせる居場所「アリスの広場」を運営。「アリスの広場」はTURNフェス3に参加。

44 この中と　この世の中の中にこそ

佐藤悠［アーティスト］

「TURNした今の社会」で、今何が変わったのか、また、何が変わらなかったのか、私にはよくわからない。

そもそも、もっとずっと前から、変化は起こり、変容を余儀なくされて生きてきた。

そして、どうしようもなく変わらないもの、変われないものと共にも、また生きてきた。

何が変わり、

何かは変わらないという毎日を送り続けていた。

それは、あの震災の日からかもしれないし、あのテロの日からかもしれない。

世界の終末が来ると言われた日からかもしれないし、自分が死ぬということに気づいた日からかもしれない。

その日から、何かが変わり、

何かは変わらないことを繰り返して生きている。

生きていくというのは多分そういうことだ。

ずっとTURNして生きてきたのだ。

それに気づいたのは割と最近だったけれど。

もし、「TURNした今の社会」が、

「今」だというなら、

もし、この状況の中で、変わったこと、

変わらないこと、があったとすれば、

「日常」とされる日が来た時に、

また、TURNをしなければならないということだ。

躊躇なく。

——

さとうゆう　「いちまいばなし」「旅する家」「知ったかアート大学」など、言葉、対話、物語、伝達などを軸に、全国各地で様々なプロジェクトを行っている。TURNフェス4に参加。

他人とつながっている感覚

サム・ストッカー［アーティスト］

Our sense of being connected to others

Sam Stocker［Artist］

It is surprising how easy it is for us to connect regardless of where we are in the world. People often say how much smaller our planet has become since the internet arrived, yet the touch of a hand on a surface or an unprotected sneeze on a train has connected people across cities, oceans and seas.

Art exhibitions have been closed to their audience. Quarantined streets, parks, and shops everything that were no longer considered necessary shut behind closed doors. We were advised to stay at home. To wear masks. To distance ourselves from each other. Yet connections were still made.

As artists we want to connect to others with our artwork, even when we develop ideas from the most personal of subjects. It's very difficult to decide what should be the theme of our practice. Meaning can be found in the simplest of things. Even when terrible events surround us, when we can't even leave the home, we have to search and dig for positives.

We remain worried about our friends and loved ones. We began to care about strangers. To consider the families of people who names we would never know and faces we may never see. Our lines of connection were interrupted yet even the act of staying home became the act of caring.

Can we make art out of love? Maybe. Love like all words is just a symbol of the idea that we care, that we connect.

Even now in these technological times it can be difficult to see what is clear and in front of us. Sometimes we still need a torch.

The energy that can be created by a group of people is a form of magic and light in the world. When I worked with Turn maybe 3 years ago now, I met a group of people who were said to struggle in their own space yet when they came together the atmosphere produced was just as palpable as electricity. Their laughter and energy was inspirational. It was a pure form of connection to each other and whoever happened to be within their locality.

We have learnt over recent times that our actions can cause someone's short time in this world to be turned. We have a choice as to how we affect the world around us. When we work together, we can turn things to nearly any purpose we choose.

The internet for many became the main point of connection to the world. Working from home was supposed to be a problem yet it created a chance for us to reconnect with loved ones. We had parties around the world sharing experiences through computer screens. An unexpected turn in fortunes pushed us to test our resilience and many people made these times as best as they could be. Physical exhibitions took a break but digitality ensured that caring about each is possible even when shut away from the herd.

就労継続支援B型事業所「ハーモニー」との交流を通して、TURNフェス2の会場で生まれた作品

↑本文の和訳はこちらから

45

サム・ストッカー　英国・ロンドン生まれ。建築と彫刻、彫刻と家具、家具と場所といった造形の境界に着目し、自然と人工を溶解させる作品を制作。TURN交流プログラム、TURNフェス2に参加。

日比野克彦 《アートのX(クロス)》 2020年

46
2020.4.7–2020.5.25 備忘録

新澤克憲［ハーモニー施設長］

4月7日からハーモニー所内での活動の多くを休止。

「そこで時を過ごす」ことが最大の特徴の場なのに、集うことができなくなるのは痛手でした。

それでも、何をいっしょにやろうか。想像しては、投げかけ、確かめ、揺れる。

幸い、電話や訪問で繋がることはできました。いつもより長く話せました。ビデオチャットでミーティングをやり、自宅で書いたり撮影したものを送ってもらいました。それが缶バッジやWebのコンテンツになったけれど、やりとり自体がお互いを確認することでした。私は在宅作業や訪問先への直行直帰のおかげで体も楽で健康的な生活を送ることができました。

6月からビクビクしながら活動を再開します。

緊急事態宣言解除の日。人事故の影響で隣町の駅のホームに人が溢れたとニュースが伝えました。身を投げた方は存じ上げません。誰かにとって生きることが苦痛に感じる世界が変わらずそこにあり、「身体距離2m」という御題目など、すぐに崩れてしまう。その二つが寝ぼけた頭を直撃しました。就労中のメンバーも失職し、仕事が減ったから来なくていいよと冷たい言葉をかけられました。

何かあると弱き者にしわ寄せがやってくる。壁は微動もせず、そこに見えています。

——

しんざわ・かつのり　東京都世田谷区にある、心の病を持ちながら暮らしている人が利用する就労継続支援B型事業所の施設長。「ハーモニー」は、TURN交流プログラム、TURNフェス1〜5に参加、TURN LANDを実施。

47
ゆるく見えてるとしても大真面目だったはず

鈴木一郎太［株式会社大とりとレフ　取締役］

静岡県掛川市で今秋開催予定だった芸術祭「かけがわ茶エンナーレ2020」のための引っ越しを元々予定しており、感染拡大の兆しが見え始めていたが4月に転居した。JR掛川駅から車で20分ほどのこのエリアは、日中は鳥の声が聞こえ、田んぼに写り込む空模様がうつくしい片田舎だ。

引っ越し早々、不注意から肋骨を折り、自粛生活に拍車がかかることになった。ただでさえ狭められた行動範囲がより狭くなり、機敏には動けず、目新しい環境の中で好奇心と自制のバランスをとる必要が出てきた結果、周囲の小さなことに注意を向けることが増えた。徒歩10秒（怪我があると30秒）の田んぼでかしましくしている鳥を毎日のように眺めるようになったのも、そのひとつだ。

そこにいつもいる一種の鳥は、自分で縄張りと定めたエリアに入ってくる他の生き物に対して、声をあげたり、飛んで威嚇していた。2羽のツガイで、朝から晩まで他者を排除しまくるその姿にだんだんと面白みを感じるようになった。

渡り鳥であるこの鳥は、縄張り意識が強く、排他的な行動は種の特徴なのだそうだ。渡った先々で勝手に縄張りを決め、他者を追い出すことに一生懸命打ち込んでいること、それがDNAレベルで抗えないことを想像すると、いじらしさすら感じる。しかしそんな気持ちとは関係なく、この鳥は僕も威嚇してくるようになった。でも、脅威ではないので、鳥に威嚇対象として個体認識されていることをうれしく思ったり、のんきに構えている。

脅威という意味では、今の新型コロナ禍ほど、全世界共通の脅威もなかった。またたくのんきに構えていられない状況だと思うが、一方で緊張感が高いからこそ、適宜のんきにゆるむことを選択する、というのも技術になるのかもしれない。アートが「多様性」に関わる際もまた、緊張や切迫を感じながらも、あえて柔軟になり、ゆるくも大真面目なまなざしを社会に向けていたんじゃなかっただろうか。

——

すずき・いろうた　企画、事業計画や、マネジメント、建築設計まで、社会の多分野と連動した文化事業を行う会社を共同設立。TURNフェス4に参加、第4回TURNミーティングに登壇。

48
混沌の中に希望を感じて

鈴木竜一朗［写真家］

2019年は自分にとって移動の多かった年で、ざっと思い出すだけでも国内外を12都市、ほぼ月に1度のペースで飛び回っていました。そして今年の1月末、旅先から帰り着いた成田空港で、新型コロナを取材する沢山の報道陣に驚きました。

COVID-19の病原体がすぐ近くまで迫っていると肌で感じたのがこの時でした。その後の世の中の変化は改めて述べるまでもありません。

6月半ばには地方へのレジデンスも決まっていましたが、もちろん延期に。しかしこの状況だからこそできるリサーチもあるのではないかと、現地の方々とZoom（ビデオ通話アプリ）を用いてインタビューする形で「滞在前の滞在制作」が開始されました。今のところ手応えは上々です。

現在、あらゆる人々が等しく先の見えない混沌の中に置かれていますが、社会の脆さや歪さにかつてないほど多くの視線が集まったということに、自分は絶望よりも希望を感じています。それは社会をより良い状態に変化させるきっかけにもなっているはずだからです。

そしてこれまでTURNが扱ってきた多様性の課題と、それらをめぐる考察と実践、また示してきた姿勢はとても重要で、まさに今必要とされるものだと思います。

個々がそれぞれの領域で、しなやかさと工夫をもって、楽しく豊かにサバイブしていく時代。

自分はそんな風に捉えて、前向きに生きてゆこうと考えています。

——

すずき・りゅういちろう　生物学や人類学、民俗学などの領域に関心を持ち、様々な土地に出向き撮影をしている。TURN LAND、第8〜10回TURNミーティングなどの写真撮影担当。

49
リアル×オンライン×想像力

関場理生［ダイアログ・イン・ザ・ダーク アテンド］

まる2カ月、99%家から出ない生活をしています。正直この生活は楽しいです。というのは、インターネットってすごい！　リアルでは簡単にできないことがネット上の文字データであれば、PC音声や点字ディスプレイで容易に読んだり書いたりできる。高齢の方にも、耳の聞こえない方にも、あるいは理解が早い、遅いにかかわらず自分の言葉が同じように届くのです。

一方、この生活の中では自己刺激を探していることにも気が付きました。ニュースやツイッターの中から自分の怒りに触れるものを積極的に探したり、面白いものを見つけることさら笑ったり。心が刺激をほしがっているようです。生身の自分が出かけていく生活は、道を歩くだけ、電車に乗るだけで緊張したりほっとしたり、刺激に溢れていたのです。特にインターネット中心の生活になってから味覚以外の五感をほぼ使っていない気がしています。

芸術においてもオンラインを活用できます。ある意味誰もが平等に、自由な関わり方で作品に接することができるでしょう。半面、生で触れたときほどの衝撃は無いのかも知れません。ただし日常生活と違って、芸術には想像力が付きものです。想像力は、生身だろうとオンラインだろうと変わり無く発揮できます。以前のようなアートの形と合わせて、新しい作品が生まれることを期待しています。

——

せきば・りお　視覚障害当事者として演劇に携わりながら「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」のアテンドとして対話の場にかかわっている。TURNフェス5に参加。

50
夢で会いましょう

瀬戸口裕子［手話通訳士］

人と会うことが出来なくなってしまった自粛の間、不思議なほどによく夢を見るようになった。朝、目覚めるとリアルすぎる夢の余韻から抜け出せなくなったこともあったほどだ。どんな夢かというと、懐かしい人や、ろう者と楽しくおしゃべりする夢だったり、TURNでお世話になっているアーティストの富塚絵美さんも登場した。「また、おもしろいことが始まるんだ」と夢の中でワクワクした感覚を未だにはっきり覚えている。きっと、人と会いたいという無意識の願望を夢で満たそうとしていたのだと思う。

正直、意識下では人と会わない時期があっても良いと思っていた。自粛の間、自分の生活を見直すことも出来たし、「おうちにいる」という生活が意外にも充実したものであることも発見できた。夢の話に戻るが、以前ろう者と夢の話で盛り上がったことがある。「夢の中でも手話で話すのか」と聞いたところ、そのろう者は「当然、手話だ」と答え、寝言も手話だと言った。だが、別のろう者は「手話を使わないで声だけで話している夢を見たことがある。起きた時にすごく不思議な気持ちだった」と話してくれた。そして続けてこう言った。「死んだあの世でも自分は手話で話すのだろうか」と。

話は逸れたが、人はどんな状況でも夢を見たり想像できる力を持っていて、きっとそれが生き延びる力（レジリエンス）になり、新たな世界を作る可能性につながるのだと思う。

——

せとぐち・ゆうこ　TURNの情報保障等のコーディネートを担ってきた「シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（TA-net）」のメンバー。TURNでは作家のプロジェクトやイベント等で手話通訳を担当。

51
より長く深い関わり

そねまい［アーティスト］

ここ、4年間は旅をしながらその国、その場所の日常生活に触れることを大切に生活していました。2019年の夏にTURN in TUCUMAN, BIENALSURに参加させて頂いた後も、タイ、ラオス、ミャンマー、ネパールとさら月間に渡り旅をし、タイのチェンマイではアルゼンチンと同じワークショップを行い、今年の1月にトルコから帰国後ウイルスの猛威が襲ってきました。

このウイルスによって、新たな出会いは難しくなってしまったと思いますが、インターネットを通して今まで訪れた国でできた友人やアルゼンチンの交流先の方達と連絡をとる機会が増えました。

ですが、やはり私は人と居るときの距離、温度、空間や匂いがとても好きです。交流も、その場所の同じ空気を吸うことでより話が弾んだり、急な展開が生まれ交流が深まるものだと感じてきました。

新しい出会いを求めてきた私ですが、これからの時代は沢山の人に出会うのではなく、より長く深い関わりをTURNし続けられるようになると感じています。もちろん新しい出会い、今まで行った国の友人に会える日、行ったことない国にも行ける日が来ることは願っていたいと思っています。

——

そね・まい　織物の糸を人と人のつながりをもたらすツールとして作品制作を模索している。TURN交流プログラム、アルゼンチンで開催されたTURN in TUCUMAN, BIENALSURに参加。

52
施設での変化で思うこと

高田紀子［板橋区立小茂根福祉園　生活支援員］

ソーシャルディスタンス…、対人介助が常にあるこの施設でどうやって取り組んでいくのか。ウイルス終息のために重要でかつ早急に求められるメッセージとなりました。

“終息のためにできること”、“これからの支援”を中心に約3か月間、様々な思いや考えを巡らせながら、今後続いていく環境のための準備をしています。

今まで近づいて話していた形が変わります、今までおしゃべりしながら食事を摂っていた空間が変わります、顔の表情でキャッチしていたコミュニケーションが変わります。だからこそ、ちょっとした気遣いや意識がより求められ、この関わり方に利用者さんも我々も慣れていくことが必要なのかもしれません。

ゆっくり話そう、写真や文字をより多く用いて関わろう、笑顔を意識しよう、時間をかけよう、そんな風に思います。また、この空間に慣れたとき、人との心の距離感はどうでしょうか。今までよりも、人は感情や優しさをより感じて求めるように思います。

利用者さん達は、早くアーティストさんに会いたいと思っているはずです。TURN活動を経験している私たちがこれからのTURN活動でできること、求めていること、これから皆で考えていきたいと思います。

TURN＝人が本来もつ力、これをどんな風に広げていくか…、楽しみです。

——

たかだ・のりこ　東京都板橋区にある、生活介護サービスと就労継続支援B型サービスを行う福祉施設勤務。「板橋区立小茂根福祉園」は、TURN LANDを実施、TURNフェス1〜5参加。

「場」の持つ力をどう伝えるか

高野賢二［クラフト工房La Mano（ラ・まの）施設長］

2018年からスタートした、「クラフト工房La Mano」がおこなうTURN LAND「手のプロジェクト」。地域の方と綿花の成長や糸つむぎを通して交流し、La Mano や La Mano でおこなわれている障害のある方の活動を知っていただくことが目的です。そんな場の中心が普段は障害のある皆さんが通い、織りや染めの物づくり、アート活動をおこなう福祉施設です。La Manoは、自然に囲まれた環境で、活動に使用している建物も築100年の民家を大事に使っている、そんな場所です。

場の持つ力なのか、毎回、集う方は少しずつ異なるけれど、なぜか毎回、親戚の子供から大人までがあつまったような、ほっこりした雰囲気になります。日々活動する障害のある方だけでなく、地域の皆さんにとっても、大事な場所になりつつあった中、新型コロナの影響で場に集えないという状況になりました。

その場所に赴くことで感じることがたくさんあると思います。空気感やこれまでの時間やその場にある物の存在や息遣い。La Manoは、これまで場に来ていただくことで、その魅力を伝えてきました。いま、それが難しい状況の中、どのようにこの感覚を伝えていくか、知っていただくということが課題です。これまでの当たり前から、少し角度を変えて、皆さんに何かをお届けできたらと思っています。

——

たかの・けんじ　東京都町田市にある、障害のある人とない人が共に手仕事に励む就労継続支援B型事業所の施設長。「クラフト工房La Mano」は、TURN交流プログラム、TURNフェス1〜5に参加、TURN LANDを実施。

53
「家族」、「家庭」という単位の存在感

高本敦基［美術家］

もちろんプライベートな領域であるので複雑な問題も多くあります。時間も意識転換も必要ですが、まずは気軽に家庭で参加できるような展開を考えていきたいです。現在は今まで行った活動内容を家庭に向けて組み立て直す作業を行っています。

家族や家庭という単位が文化活動の中に少しずつ増えてくることも、「TURNした今の社会」の可能性であり、展開ではないかなと感じています。

——

たかもと・あつき　日常の素材や行動の観察から社会と人間のつながりを見いだす作品を制作。岡山県の障害者支援施設「社会福祉法人旭川荘」との交流からTURNフェス2-3に参加。現在も旭川荘でのアート活動を継続中。

54
「家族」、「家庭」という単位の存在感

旭川荘さん（岡山県）と活動を行っている高本敦基です。活動をじわじわと滲んでいくようなイメージで捉え、「虹ム」プロジェクトと名付けてこの夏には展示も行う予定でいました。けれど現在、新型コロナウイルス感染防止のため活動も休止としています。

ステイホームが日常に取り込まれた現状で感じるのは「家族」や「家庭」という単位が存在感を増してきたことです。

思えば文化活動はほとんど個人単位での参加でしたので、これからは家族や家庭という単位がもっと入ってきてもいいのかもしれません。

交流活動でも、家庭での体験や居住施設のスタッフさんの顔など、日常の営みを共にする人たちが表現の中に出てきたと思い返します。何かしら一緒に参加してもらえたら一層楽しまれると思います。

55
E・食・住

滝沢達史［アーティスト］

田舎で児童福祉施設を運営しています。コロナの影響で学校が休みになり、こどもたちと3ケ月を過ごしました。緊急事態宣言も発令されましたが、私たちに関しては、全く影響はありませんでした。

今回のウイルスは、影響のあるものと無いものを明確に分けたかもしれません。私自身、移動を伴う美術の仕事は減りましたが、物を作る機会と思考する時間に恵まれています。実現したいプログラムが多くあり、周りの友人たちもこれまで手がつけられなかった仕事に着手しています。

今必要とされていることは、今回のコロナで始まったことではなく、これまでにも考えられたことです。「エネルギー、食、住環境」。そして、それらを思考するアイデア。今回の事態は長期化すると予想されていますので、この状況の中でも機能できる新たな価値を生み出していきたいと思います。

——

3密を避けると、原始に帰るこどもの振れ幅

たきざわ・たつし　アートで、社会を心地良くする方法を模索中。岡山県倉敷市の児童福祉施設「ホハル」代表。TURNフェス3に参加。

56

孤独な時間に耳を澄ます

田中みゆき［キュレーター／プロデューサー］

このタイミングで得られた孤独な時間は、わたしにとっては予期せぬ貴重な時間となりました。

いつしか起きている間ずっと何かとつながり、思考や感情を共有する状況に身を置く生活をしていました。「つながり」は世界を広げてくれる一方で、自分と向き合う時間をこんなにも減らしていたのか、と積み上がったままの本や放置された押入れの荷物を眺めながら何度となく思ったものです。

ぽっかり生まれた孤独な時間は、そんなわたしにはしっくりくるものでした。この状況は早く収束すべきとは思いますが、この期間に生まれたさまざまなコミュニケーションのあり方を急場しのぎのものとせず、社会生活やコミュニケーションの変革の機会と捉えて定着させるには、あと少し時間が必要だとも感じます。そこで生まれるオルタナティブな選択肢は、これまでの当たり前の社会に潜んでいた生きづらさを和らげる可能性があるかもしれない。このまま元の生活に戻るのは惜しいと思いませんか？

あと、以前よりもラジオを聴く時間が多くなりました。この期間に世界中で公開された膨大な映像アーカイブについても、音のみで観たものも少なからずありました。声が届けられる情動的な価値にたびたび心動かされ、映像だと想像できる展開に音だと驚かされる。わたしにとっては耳を澄ました時間だったかもしれません。

——

たなか・みゆき　「障害は世界を捉え直す視点」という考え方のもと展覧会やダンス、映画やゲーム等、実験的なプロジェクトを企画する。TURNフェスに参加、第2回TURNミーティングに登壇。

57

人それぞれの距離の可視化

田村なみちえ［ラッパー／着ぐるみクリエイター］

ソーシャルディスタンスを意識しながらの生活が、自分にとってコロナ以前よりも過ごし易いと感じた。それは、上辺での人とのコミュニケーションが格段に減ったから。魂のこもっていない「いらっしゃいませ」は無言と同じだった事に心が気づいた。全員が感染対策に気を使った中で、余分な事が減り、会話も少なく、静寂が訪れる。こちらの方がより良い精神的なコミュニケーションだと感じている。

問題点があるとしたら「もしかしたら社会が前の状態に戻そうとする場合がある事」だ。決して以前の形を取らない方がいい事が沢山ある。私自身では新しい世界への道筋を作るアプローチは芸術表現で行うべき事であると考える。

私は内向性が強く、外に出ても必要以上のコミュニケーションを求めない。だから、現状の距離感を永続しまではいかないが、ウイルスから人への距離の再認識になるきっかけになったであろうこの現状から、新しい外の世界との距離感で接していきたいと考えている。また家で出来る事の可能性も広がりつつあるので、内的世界を充実させる事でより世界と密接になるのではないかと考えています。

——

たむら・なみちえ　着ぐるみなどの立体造形を手がけると共に、ラップ・詩・歌・身体パフォーマンスを用いて表現活動を行う。TURNフェス6に参加を予定していた。

58

覚書 2020年5月26日

田村 大［映像演出 脚本家／らくだスタジオ］

「違いを超えた出会いで表現を生み出す」、TURNというアートプロジェクトを説明するこの一文について、新型コロナウイルスで揺れ動く日常の中で延々と考えていました。このウイルスは良くも悪くも見て見ぬ振りをされていた多くの「違い」の境界線を鮮明にしてしまったように思います。「新しい生活様式」をはじめとした、それ以前には想像もなかった概念が立て続けに提示され、人々に「同じ」行動様式を取るように要請し、そこからはみ出した「違い」が糾弾される。ある「違い」が自分にとって不利益をもたらさないのであれば、それを許容することはそれほど難しくはありません。しかし誰もがその不利益を被る可能性が顕在化してしまった今、些細な「違い」が多大な不利益を生む可能性に人は怯えているように思います（残念ながら、その可能性は非現実的なものでないようです）。

もちろん以前から「違い」による問題は数多く存在していましたが、それを乗り越えるための一手段がTURNも掲げている「出会い」という概念であったかと思います。それは私自身がTURNに参加する中で日々実感していたことであり、その私が体験した「違い」との「出会い」を、映像という「表現」を通して視聴者に疑似体験していただくというのが、私が映像制作するうえで信条としていることでもありました（それ故に私はカメラを担いで出来事が起こっている現場に立つという行為をとても重要視しています）。

今、出会ったことがない何か、あるいは出会ったことのない誰かを想像しながら「表現」をすること、あるいは「違い」を認めることはとても難しいと痛感しています。少なくとも私にとって、カメラを持って現場に立てない、「生身を介して」出会えないということは大きな問題で、正直なところ「違い」から生じる恐怖感に潰されそうになる瞬間もありません。ではどうすればいいのでしょうか？「出会い」の欠落を何か別の手段で補うべきなのか？「出会い」という概念自体は普遍であり、この状況に陥らないよう策を巡らすべきか？　そもそも私がやるべきことは今まで通りの「表現（映像）」だけで良いのでしょうか？　この非日常が日常化していく中で、私自身は未だその答えは出せずにいます。

——

たむら・ひろし　らくだスタジオを共同設立後、多様な映像制作に携わる。TURNのドキュメンタリー映画を撮影するプロジェクトを実施。TURNフェス1～5に参加。

59

ハバナの街角で

徳本萌子［アーティスト］

授業も仕事もオンラインが推奨される日々。一年前、私達が滞在したキューバのハバナでは、いまとは正反対の日常が流れていた。

ハバナはいわばオフラインの街。インターネットがほとんど普及していない。だからといって文化が遅れているわけではもちろんなく、社会主義の国の方針である。インターネットに繋がるには、カーサ（家）を抜け出し、Wi-Fi公園（電波が飛んでいる公園）に行かなければならない。そこでテレホンカードのような〝Wi-Fiカード〟を使って、太陽の下（夜の場合は街灯の下）でネットに繋がる。

ハバナの公園は大変にぎやかで、チビリコ（生地を揚げて砂糖をまぶしたお菓子）売りや喧嘩（ケンカ）する犬、サッカーをする子供、スピーカーから音楽を各々に流す若者たち…。公園のベンチから溢れ出し、あらゆる出っ張りや段差のへりに人々が腰掛ける。

例えばあなたが誰かをハバナの街で探しているとして、電話を使うより先にやらなければならないことがある。まず、その人が住んでいる通りに出て大声でその人の名を呼ぶのだ。うまく行けば、その人が窓から顔を出すこともあるし、近所の人が一緒に探してくれることもある。

ある日、買い物に出かけた私達は、街で偶然、交流施設のおばあちゃんに出会った。その時の嬉しさといったら！　明らかにキューバ人でない私達と、そんな日本人に縁のなさそうなおばあちゃんが手を振りあっている。一気に通りの視線が私達に集まる。でもそれは「チーノ（中国人）か！　ハポン（日本人）か？」と、観光客相手の物売りに注目されていた時の視線とは全く異なるものだった。私達が街の一部になった日だ。

「アスタマニャーナ！（じゃあまた明日ね！）」といってそれぞれの家路につく。公園でWi-Fiに繋がる、通りで大声を出す、ばったり出会った人と抱き合う…。どれもいまの社会では難しいことだけれど、あの公園も通りも誰のものでもなく〝みんなに開かれていた〟という感覚を思い出したい。

——

とくもと・もえこ　テキスタイルの技法を用い、植物や紙をミシンで縫い込める作品を中心に、インスタレーションや立体、映像作品を手がける。キューバで開催されたTURN in HAVANAに参加し、高齢者施設と小学校で交流を行う。

60

相変わらずの大変な日常と充実の非常時の終わりに

富塚絵美［アートディレクター／パフォーマー］

「なんでそんなになんとなくで生きられるの？」

「これでもちゃんと自分で判断してるんだよ」

私の大切な人は、私と違う判断基準で生きている。

死にたがっているようにしか見えない行動をしているから。

危機を感じるタイミングが違う。

信じたいと思うことが違う。

どうしたら考えを突き詰めずにいられるだろう。

どうしたら安心を纏うことができるだろう。

そばにいようが離れていようが、

あなたと生きる時間を楽しみたいだけなのに……。

そうこうしているうちに、いつも通り時間は過ぎていた。

なんとなーくの人たちも、相変わらずまだ沢山生きているみたいだ。真剣に生きていた人も、何人か死んだみたいだけど。

腑（フ）に落ちないことだらけの怪奇現象のような社会の中で、扱いきれない欲望や希望、幻想みたいなふわっとしたものを抱えて生きていくって……

考えただけで笑けてくる。

だって「不思議の国（ワンダーランド）」なのに、アリス役が可愛い夢中な女の子じゃなくて勘違いだらけのヘンテコおじさんみたいな現実ばっかり。

だからあなたもね、普段から柔軟に急なことしかしてなかったな、とか無駄な反省してないで、平気に生きたらいいんだよ。

社会がどのようになろうとも、人々がどのようにあなたを定義しようとも、自分の命を雑に扱うことなく大切に生きてほしい。私は引き続きこの不可解な社会を、未知に溢（アフ）れた魅惑的な世界を、貪欲に味わって生きていく。楽しみよ。

——

とみつか・えみ　アートイベントを企画運営する傍ら、ジャンルを超えた独自のパフォーマンス作品を発表。TURNフェス1～5に参加。毎回テーマを持ちながら「ともに居る場所」をフェス内につくる。

61

山へ行く——人が生きる条件や技術

永岡大輔［アーティスト］

生きるための条件が揺さぶられた気がする。これは、今まで経験した何とも違うこと。だから、自分の過去の経験の引き出しから何が使えるか取り出そうにも難しい。そして数ヶ月前と同じことをしても同じじゃない。その同じじゃないこの感覚からは、もう元には戻れない。いや、戻らなくて良いような感情もある。取り戻さなくちゃいけないことと新たに見つけなくちゃいけないこと——。僕は日常にある生きるための基礎的な条件や技術を一つひとつ確かめたくなった。

3月末、作品の受け渡しのため山形のアトリエに向かう。山形での感染者の報告がないためか、首都圏とは緊張感が違う。飲食店も普通に営業している。今回の感染症は検査でも解らないだけに、ある種の平穏さが単に現状把握にかかる時差そのもののようで、むしろ不安だったりもする。

そして、翌日山形県で一人目の感染者が見つかると、その数はどんどん増えていき県境や駅では検査が行われ、日本全体には緊急事態宣言が発布された。新型ウイルスは、目に見えないだけじゃなく、どんなウイルスかも解らない。その上、自分も含め誰が感染しているのか、何が安全でどういうことが危険な行動なのかとか、とにかく解らないことだらけだった。

いや、それは研究が少し進んだと言われる今でも、感染していないということの証明が難しいし、決定打となるような対策が取れるようになるまではもう少し時間が必要なのだろう。そしてこの「解らない」という状態は、とにかく縛る。街の明かりは消え、人も家に籠るしかない。縛る対象に接触を伴う活動なのだけど、活動が縛られた分だけ心まで縛られているようでしんどくなる。

そんな中、僕は、祖父母と暮らしていた子供時代、彼らから聞いた大戦中の疎開先での話を思い出していた。山形と秋田の県境のその村には、綺麗な山と川があり、山菜も採れたから、生きるために困ったことなどなかったらしい。人々は、経済をストップさせることで、生きることができなくなると思っている。それは僕だってそう思うところはある。

だけど、戦中の疎開先で、祖父母は生活に困らなかったと話していた。当時、通常通りの経済活動をしていたとは思えない。それならそれはなぜだろう？　山や川などの存在だろう。だから、丁度今、僕が山形にいることは単なる偶然ではないと思った。それを確かめるのに、こんなに良いタイミングはない。県内の移動が可能になると、僕は、人気のない日の出の頃に、山に行くことにした。

——中略——

今、横浜に僕は戻っている。

まだ、このひと月の実践を通して何かを言えるほど解ったことはない。とは言えこれまでにはない発見がこの間に多くあったし、それらはきっとこれからの僕自身の生きる上で大切なことになるだろうと思う。自分の崩れきった世界観を乗り越えるために実践した小さな生活、しばらく続けていこうと思う。

——

ヒメオドリコソウとカラスノエンドウ

祖父母が戦中に疎開した村

62

思いがけずな、内向きな時間

中﨑 透［美術家］

この原稿を書いているのは2020年5月25日で、ちょうど全国で緊急事態宣言が解除されたタイミングである。僕の普段の活動としては、国内での移動が多く、各地でリサーチや滞在制作をしたり、時にはたくさんの人と関わりながら作品を作ったりしているというのもあり、未だ県境を越えて足を運び活動するにはもう少し時期を見つつ、どのくらいから徐々に活動を再開していくのだろうか、とまだまだ悩みは尽きない時期でもある。

3月の後半に滞在制作から拠点である茨城県水戸市に戻ってきた。それから今までちょうど2ヶ月くらい引きこもり気味に過ごしている。地方だけに普段から車生活というのもあり、作業場に行ったり来たりなんだかんだでほぼ毎日外出はしている。ここ10年くらいは忙しく出張が続き、こんなに長い時間ずっと地元にいる機会はなかったなあと改めて思いながら過ごしている。

個人的な性分として、たくさんの人とワイワイしながら動くのが好きな外向きな性質と、一人でコツコツと独自に制作するのが好きな内向きな性質の両方があって、なるべくバランスを取りながら活動したいと思いつつもこのところ外向き過多になりがちで、思いがけずこういう時間を過ごせたのは案外よかったのかもしれないと思っていて、むしろ3～5年に一度のペースとかでこのくらいの内向きな時間を意識的に確保できると健全なのかもなあ、と本気で考え始めている。

庭に畑をつくりました

63

みんな、何かの、当事者である

長津結一郎［九州大学大学院芸術工学研究院助教］

転換期にきているのは確かだ。

在宅勤務の心地よさに気が付き始めている。満員電車にはしばらく乗りたくない気分になる。植物を育て始めている。オンライン飲み会にはもう飽きてきた。オンライン授業のための映像編集にはもう慣れてきた。

大学教員としての自らの立場を顧みると、つくづく特権的な立場だと思う。（し、実際そう言われたこともある。）パソコンの前だけですべてが完結できる仕事で、もとより裁量労働制で月給が支払われている。今月も振り込まれたこの給料の一部を寄付しようと思うも、あまりに多く聞こえる窮状に、どこにクラウドファンディングしていいか悩む。

いま、「わたしたち」は、みんな、何かの、当事者である。

だが、その何が当事者なのか、というのは、まだ言葉になっていない。そこを自己省察すること、エスノグラフィーすることから、新しいふるまいが、新しい表現が生まれる。（オンライン配信ではすべい取れないかもしれない）表現の萌芽が、そこかしこに生まれている。

そのことを、これまで使ってきた言葉で表象できるのかは、わからない。そのことを、「TURNした今の社会」と名付けていいのかどうかは、まだ、わからない。

——

ながつ・ゆういちろう　文化政策学、芸術社会学等をベースに、多様な人々の表現活動に着目した研究を行う。TURNフェス5に参加、第3回TURNミーティングに登壇。『TURN JOURNAL SUMMER 2019—ISSUE 02』『TURN JOURNAL SPRING 2020—ISSUE 03』にて連載。

あと、外食もあまりせず自炊生活になり、飲み屋にも行かないので酒の量も減り、少し痩せたりもして、なんだかちょっと健康になった気がしている。一方で夜型生活は加速している。

——

なかざき・とおる　共通認識のなかに生じるズレをテーマにゆるやかな手法を使い、パフォーマンス・映像など形式を特定せず制作を展開。TURN交流プログラム、TURNフェス1-4に参加。

64

顔のある人間

西尾佳織［劇作家・演出家／劇団「鳥公園」主宰］

今まで抽象的な魔法のように感じていた物流が、実在する人間の仕事の連鎖としてイメージされるようになりました。「ボタンをポチッとクリックすれば、欲しいものが次の日には手元に届く」のは、注文に応じて工場や倉庫から品を出し、トラックで運び、一軒一軒の家に届けている顔のある人間がいるからなんだなと、配達の遅れや商品の欠品が起こって初めて具体的に実感しました。

ドイツでは、アスパラガス農場で働く人手が足りなくて、ロックダウン中のルーマニアから特例便を飛ばして労働者を補充したそうです。4月末がホワイトアスパラガスの収穫時期で、その仕事に従事する「安い」季節労働者が東欧から西欧にやってきます。命とアスパラの交換です。

よく考えたら本当は、フィリピン産のバナナやブラジル産の鶏肉がスーパーで一番安いのも不思議な話です。日々数十円安い食べものを買い続けることで、どういうシステムを支えちゃってんだろう？　私ちょっと、食べることを把握できてなさすぎるのでは……？　と思って、庭に畑をつくりました。なすとゴーヤとズッキーニと青梗菜（チンゲンサイ）、えごま、冥加（みょうが）、紫蘇（しそ）、ディル、バジル、コリアンダー、ルッコラ、スーパセロリとミントを育てています。

——

にしお・かおり　「正しさ」から外れながらも確かに存在するものたちに、少しポケた角度から、柔らかな光をあてようと試みる。TURN交流プログラムに参加。

本文の完全版はこちらから

（中略の内容）
山に入る
シロップづくり
『かてもの』／川醤油づくり
学童集団疎開
笹巻き
祖父母の疎開の地

ながおか・だいすけ　記憶と身体との関係を見つめ、創造の瞬間を捉える作品を制作。TURN交流プログラム、TURN LAND、TURNフェス～5、アルゼンチンで開催されたTURN in BIENALSURに参加。

特別寄稿②

「異」から「違」へ

磯野真穂
［人類学者／医療人類学］

日常生活の変更を余儀なくされ、人や社会が新しい秩序の構築を迫られた時、そこには必ず排除の力が働き、排除したくなる異物が増える。新型コロナウイルスと私たちはどう付き合い、人類として排除のない世界を共有できるのだろうか。

▽排除の構造 ―「違」と「異」の違いから―

文化人類学者の山口昌男は、著書『文化と両義性』の序論の中で「異」と「違」の違いについて次のように述べる。私たち日本語話者は、「異」を自分にとっての外部を指す際に使い、他方「違」を、内部に存在する何かを指す際に使う。

例えば「異邦人」は、自分たちのグループには属さない人物を指す。異物といえば、そこにあってはならないものがそこにあるから排除した方が良いといったニュアンスを孕む。他方、「腰に違和感がある」と私たちがいう時、当然ながら腰そのものを取り除こうという発想には至らない。整体に行ったり、ストレッチをしたりしてその違和感を取り除こうと私たちがするのは、腰にある収まりの悪い感じを取り払うためである。部屋の模様替えも同じである。何だかしっくりこない、何だか季節にそぐわない。その「違和感」が私たちを模様替えに向かわせ、モノは移動されたり、しまわれたり、捨てられたりする。

「異」と「違」の観点から、模様替えにおいて、移動されるモノ、しまわれるモノ、捨てられるモノの違いに着目してみよう。「移動されるモノ」は置き場所が変われればしっくりくるモノに変化する。「しまわれる」ものは、部屋の中の目につかないところに追いやられることで、しっくりの称号を得る。他方、捨てられるモノは排除した方がしっくりくると判断されるかわいそうなモノたちである。つまり前者二つは、部屋の内部に存在を留めることができるが、後者はそれすら許されない。「違和感」から始まる模様替えにおいて、あるものは「異物」となり、ゴミ袋に入れられ部屋の外に追いやられてしまう。

すでにお察しと思うが、何らかの秩序――例えば身体とか、部屋とか――が乱れた際、「異」と見なされるものは負の意味合いを付与され排除の対象になる。本来あってはならない「異」が自分たちの心地よい生活を乱している。だからその「異」を自分たちの外側に排除してしまえ、そうすれば心地よさは戻る。そういう発想である。

この際に注意したいのは、「違」と「異」は私たちの視線から離れ、所与としてそこにあるわけではないことである。我が家には猫がいるが、少なくとも私が見る限り、人間のように部屋を片付けようという素振りは一切見せない。彼女にとって部屋にあるモノはモノでしかなく、「違」も「異」も存在しない。「違」と「異」を浮き立たせるのは、「部屋を掃除しよう！」という私のみなぎる心気である。

面白いことに、このやる気こそが「異」を増殖させる。例えば、私の脳裏に誰もが羨む素敵なお部屋が描かれており、その実現化を私が目指しているとしよう。すると日常の掃除のレベルであれば「違」で済むものが、「異」と認識され、次々とゴミ袋行きになるだろう。部屋の模様替えとは部屋の秩序を作り直すことであり、その行為そのものが「違」と「異」を浮き彫りにし、ひいては「異」を増殖させる。

▽インフルエンザウイルスは異物か？

それではインフルエンザウイルスは私たちにとって異物だろうか。これは先の例より少し複雑に考える必要がある。まず個人にとってはおおむねイエスである。インフルエンザにかからないよう私たちは予防接種を受け、インフルエンザに対する抗体を体内に生成する。もしかかった場合はタミフルなどの抗インフルエンザ薬を内服し、インフルエンザウイルスが体内で暴れすぎないよう対策を取る。

しかし社会にとってはどうだろう。私たちの社会は、インフルエンザウイルスを「異物」として撲滅したり、排除しようとしたりはしていない。インフルエンザが流行すると学級閉鎖が起こったり、個々人には1週間出社禁止といった感染拡大防止策が取られたりするが、これによる死者が毎年国内で1000人程度出ることは受け入れている。やろうと思えば、この1000人を減らすことは可能だろう。インフルエンザ患者を別の病棟で徹底的に隔離し、検査で陰性が2回出るまで退院を許さない。インフルエンザが流行をしたら一斉に休業要請を出して社会の動きを止めればいいのである。

なぜ上記のような抜本的対策が取られないのか。それはインフルエンザ流行のたびに社会活動を停止すれば、多くの人々の生活が立ち行かなくなることを私たちが知っているからである。その意味で、私たちはインフルエンザウイルスを社会に留めておくことを許容している。言い換えると、私たちはインフルエンザウイルスを「異」の位相ではなく、「違」の位相で捉えていること。私たちは時間をかけて、インフルエンザウイルスとの付き合い方に関する塩梅を得たのだ。

▽「異」としての飛沫

前置きが長くなった。そろそろ新型コロナウイルス感染症の話に移ろう。緊急事態宣言解除後に新宿を歩いたら、ビックカメラの店員がフェイスガードをつけて接客をしていた。私が通っているジムは「マスクで鼻と口を隠す」ことが義務付けられた。行くたびにハードな持久力トレーニングをしているかのようである。

6月のはじめ、夕方の情報番組をつけたら「気合いを入れない空手道場」が紹介されていた（心の気合い、を使うそうである）。それを観ていたら、水泳指導員用の耐水マスクが大人気という二つのニュースが飛び込んできた。もともとスポーツ庁はプールについて「適切な塩素濃度なら水中感染リスクは低い」としているが、手取り足取りの指導に対して心配の声があるのだという。

そういえばその少し前には、飛沫拡散防止の仕切り板は顔より低いと効果が小さいというシミュレーション動画が公開されていた。記事から引用しよう。

> 理研の坪倉誠チームリーダーは「オフィスのパーティションは会話のために目が見える高さの場合が多いが、せきをした場合、10マイクロメートル以下の飛沫は空気の流れにのってパーティションを回り込み、相手にかかる。感染を効果的に防ぐには、最低、頭ぐらいの高さが必要だ」と話している。

私はこれを観て「何て危ない！」ではなく、「予想以上に他人の飛沫を日常から浴びていて、それでも何も起きないんだな」と思った。しかし記事はこのような感想を抱かせるために書かれてはいない。「仕切り板、顔より低いと効果小」のタイトルが示すように、飛沫の拡散を防ぎたい、ということがこの記事の趣旨である。

世の中がここまで目に見えない飛沫に着目し、それを浴びることを防ごうと躍起になったことは人類は病気との付き合い方を探ってきた。

新型コロナウイルス感染症の致命率は1・4%。65歳以下に至ってはO・O9%である（2020年6月20日現在）。「違」として付き合う方法が必ずどこかにあるはずだ。しかし、こうやって数字を持ち出し、ことへの反感もある。そうやって数字を持ち出し、命を量化することは避けるべきだ。命はその一つ一つが大切で、その一つ一つをどう守るかを私たちは考えるべきなのだ、と。しかしそんな反論には私はこう返したい。実はあなたは新型コロナウイルスのみならず、「死」すらも「異物」として排除しようとしているのではないか。「死」のない人生とは一体どんなものなのか。「命を守る」とは病気にならないことなのか、と。

参考文献
＊山口昌男『文化と両義性』岩波現代文庫、2000年
＊杉浦奈実「仕切り板、顔より低いと効果小　スパコンで防止策を解析」（2020年6月3日 21時31分（https://www.asahi.com/articles/ASN636TPJN63PLB003.html）（2020年6月8日閲覧）
＊大山稜「プール用の透明マスク誕生　泳いでもずれなくて注文殺到」（2020年6月6日 11時22分（https://www.asahi.com/articles/ASN663PXNSXUTILO1Q.html）（2020年6月8日閲覧）
＊スポーツ庁「各年度における学校の水泳指導の取扱いについて」（2020年5月22日
＊日本小児科学会「小児の新型コロナウイルス感染症に関する医学的知見の現状」（2020年5月20日
＊Worldmeter, Coronavirus (COVID-19) Mortality Rate. https://www.worldometers.info/coronavirus/coronavirus-death-rate/ (Last updated: May 14, 22:00 GMT)（2020年6月12日閲覧）

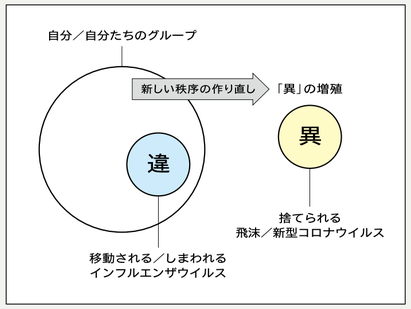
史上初めてではないだろうか。緊急事態宣言と「新しい生活様式」を経て、「飛沫」は日常の中にただ在るものから、悪しき危険な対象としての「異物」と化した。

▽増殖する「異物」と侵される交流

新しいものを自分の内側に招き入れることは――例えそれを自分が望んだとしても――ちょっとした賭けである。なぜなら新しいものは、それまであった秩序を何らかの形で壊すからだ。先の模様替えの例に再度登場願おう。新しい家具を買うことのためには古い家具を捨てたり、部屋の配置を変えたりする必要が生じる。私たちは模様替えの作業や新しい家具との出会いにウキウキするかもしれない。しかしいざ使いだすと、細かなところの配慮が行き届いておらず、捨ててしまった前の家具が恋しくなってしまうことがある。新しい家具という新参者が、これまでの部屋の秩序を古い家具の放棄や部屋の配置換えという形で崩し、その結果、心地良さが奪われてしまった。

新しい家具と違い、新型コロナウイルスは、招かれざる客である。面白いことに私たちはその客を目で見ることもできない。日本で発見された感染者数がいまだ国民の1%にも満たないことを踏まえると、ほとんどの人はその客を体内に宿す人に会ったことすらない（会っていたとしても気付いていない）。しかし疫学は、多様なグラフ、映像、テキストと結び付き、その新しい客が自を覆うほどの災厄をもたらす可能性があることを知らせ続けた。私たちは3月以降、その客を「異物」として懸命に排除しようとしている。ところがその客はお願いしても帰ってはくれない、ゴミ袋に入れて捨てることもできない。それは見えない「異物」として私たちの社会に残り続けている。

それでもなお私たちは、その「異物」と、その異物を避けられなかったことから生じる他者からの糾弾を避けようとし、結果、多くの組織が人と人との交流を諦めることを選んだ（あるいは諦めさせられた）。出会いの場であった街の店は真っ先に犠牲になり、いくつもの老舗の居酒屋が店を閉じた。日本小児科学会が小児から小児への感染は稀で、小児の重症化率は極めて低いと声明を出しても、あちらこちらの小学校で、顔を見合わせて食べる給食は取りやめになり、前を向いて静かに食べることが推奨されるようになった。介護施設での面会はオンラインのみとなり、リアルで会うことはできなくなった。



そこに、画面を通じて顔を見ることが果たして面会なのか、という問いはある。

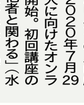
招かれざる「異物」を社会から排除することは不可能でも、自分のテリトリーからは排除したい。そんな欲望が加速した結果、それまで存在した人と人との交流を可能にする秩序はボロボロになった。

人は社会的な生き物でその根底には人と人との交流がある。しかし、「自分が感染者であるかのように振る舞え」、「そこに元気な感染者がいるかもしれない」、日々連呼されたこのような呼びかけが、その本質を取るに足らないものにした。オンラインに交流が代替されただけだ、という人もいるであろう。しかし今一度思い出したい。大量の情報が行き交うこのオンライン環境こそが、コロナの過剰な対策の一端を担ったことは間違いない。自分たちの首を絞めたものに私たちは同時に助けを求めている。

「W-thコロナ」と表現されるように、私たちはこのウイルスを自分たちの社会の中に招き入れたまま暮らしていかなくてはならない。それは本稿の論旨に照らすとコロナウイルスを「異」ではなく、「違」として見なすことである。ゴミ袋に入れて社会の外側に放り出す方法を探るのではなく、部屋の配置換えをすることによって置き場を探す作業を始めることである。

病気と一緒に暮らすなんて無理だ、そう思う人もいるかもしれない。しかし私たちは先ほど病気とともにある。皆が病気にかかり、多くの人がそれによって死ぬ連命を辿る。それはどうしても避けられないゆえ、それぞれの地域、それぞれの時代で人々は病気との付き合い方を探ってきた。

参考文献
＊山口昌男『文化と両義性』岩波現代文庫、2000年
＊杉浦奈実「仕切り板、顔より低いと効果小　スパコンで防止策を解析」（2020年6月3日 21時31分（https://www.asahi.com/articles/ASN636TPJN63PLB003.html）（2020年6月8日閲覧）
＊大山稜「プール用の透明マスク誕生　泳いでもずれなくて注文殺到」（2020年6月6日 11時22分（https://www.asahi.com/articles/ASN663PXNSXUTILO1Q.html）（2020年6月8日閲覧）
＊スポーツ庁「各年度における学校の水泳指導の取扱いについて」（2020年5月22日
＊日本小児科学会「小児の新型コロナウイルス感染症に関する医学的知見の現状」（2020年5月20日
＊Worldmeter, Coronavirus (COVID-19) Mortality Rate. https://www.worldometers.info/coronavirus/coronavirus-death-rate/ (Last updated: May 14, 22:00 GMT)（2020年6月12日閲覧）



いぞの・まほ　人類学者。国際医療福祉大学准教授を経て2020年度より独立、人類学のを魅力をより多くの人に広めるべく、2020年7月29日より働く人に向けたオンライン講座を開始。初回講座は「他者と関わる」（水曜コース、20時開講、各週5回90分）。著書に『ダイエット幻想 ―やせること、愛されること』（ちくま新書、2019年）、『急に食合が悪くなる』（宮野真生子との共著／晶文社、2020年）等がある。
オフィシャルサイト= www.mahoisono.com

65 贅沢としての「暮らし」へ

西尾美也［美術家］

庶民育ちとしては、そもそもアーティストでいること自体がサバイバルです。あえて自分本位に言えば、自らの感性に基づく中期的な戦略として、地方に暮らし、家族を持ち、生活の再発見としてのアートプロジェクトを手がけ、特定の分野や制度における表現の探求ではなく、教育こそアートだと捉えてきた身からすれば、今回のコロナ禍でもライフスタイルに大きな変化はなく、淘汰からは免れたというのが正直な実感です。文化芸術の重要性が叫ばれ支援策が講じられるのは必要不可欠だと思います。僕自身もこれを機に多様な分野の芸術に素直に興味を持ちました。ただ、分野や制度や支援に「安住」したり、諦めたりするのではなく、それぞれの技をどのように転換して社会や生活と接続するか、という人々の振る舞いに本当に強い興味があります。

人類の人間性回復のために僕が活動の手段としてきた対面でのコミュニケーションについて今は制限せざるを得ませんが、ここぞとばかりに有効性を発揮するネットワークメディアの「猛威」を前に、あらためて「人とともにある」ことの価値や可能性を語るさまざまな声に勇気付けられています。資本制社会からの脱却を考えることがアーティストであることの僕の目的でもあるのですが、最近、白井聡氏の『武器としての「資本論」』（東洋経済新報社、2020年）を読んで背中を押される思いがしました。新自由主義は人間の感性まで資本のもとへ包摂し、人々を贅沢しないように仕向けてくる。それに対抗するためには、いかなる状況でも徹底的に人生を楽しむ（＝贅沢をする）ことが重要だとその本は主張します。それはかならずしもお金をかけるという意味ではなく、むしろアートが得意としている感性に訴えかける方法によって可能になることかと思います。

コロナ終息後は何もなかったかのように社会は回るでしょうが、ステイホームや新しい生活様式が求められる今、いかに楽しく幸せに過ごすか、を考え実践しようとする人が平時以上に出てきていると思います。それは（そうでない深刻な状況の人もたくさんいるという問題はここでは棚上げします）、それは新型コロナウイルスがなくてもどちらにしてもつまらなかったかもしれない人生（生活＝生き方＝働き方）を改革するための人々のセンスを再建していく（感性／人間性を取り戻す）チャンスになると考えています。今あらためて感じて見直しているのは、戦後間もなく創刊され、今も刊行が続く『暮しの手帖』です。家庭料理の幸せから権威に抗う叫びまで、暮らしに大切なすべてを伝え続けるサバイバルのメディアです。これからますます「暮らし」を大切にする人が増えるといいなと思います。

にしお・よしなり　装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開。自身が勤める「奈良県立大学地域創造学部都市文化コモンズ」としてTURNフェス1に参加。

66 味気ない日常

布下翔碁［工芸作家］

私は今部屋の片隅で白い壁に向かって、この文章を書いています。外出自粛期間のほとんどをこの場所で過ごしました。そしてこの小さな部屋の中にあるテレビやパソコンを通じて、社会の状況を知ることができました。

経済の停滞、医療現場の困窮、臨時休校に伴う子育て世代への負担――情報化が加速した現代においては、壁に囲まれたこの部屋に座っていても、外の世界で起こっていることを知り得ました。この数ケ月、新型コロナウイルスについて数多くの情報を集め、考え耽りました。しかし、いざこの文章に向かうと、どこか他人事のような味気ないものになってしまいました。

私にとって人に会わない日々を書くことは難しいものでした。人は人に会うことで感情を発信し、刺激し合っています。一人で部屋の中で籠っていると、この未曾有の状況でさえ、自分自身と切り離された関係のないものように感じることさえありました。もし人と会って話をすることができる環境にあったならば、今ここに筆を走らせることができたように思います。

コロナ禍で私が見たものは、人と会えない味気なさでした。

ぬのした・しょうこ　やきものと漆を素材として作品を制作し、素材の魅力を伝える活動を行う。TURNフェス5、アルゼンチンで開催されたTURN in TUCUMAN, BIENALSUR に参加。先住民族にまつわる土を用いて交流。

67 温泉いきたい

野口竜平［芸術探検家］

今後の世界はますます、人間中心を前提にしては立ち行かなる物事で溢れてくると思う。

グッドな未来のために、なるべく自身に他者を取り入れ、大きいスケールで過ごすようにしなくてはならない。

例えば私は海沿いの温泉地に拠点をつくりたい。

湧きでる地底の熱や地球の運動に体を浸し、雨の日は後をさざ波散歩。降り注ぐ水で自他の境界がぼやけたら、ヤカンを火にかけ熱い茶を飲む。そんな感じがいい気がする。

リアルな共同体が分散し、複雑に入り組んだ現代社会システムに「全員の非日常」を起こしたのは、芸術でも人間でもなかった。私は当ウイルスのこの側面を肯定的に捉えている。

古来より、祝祭や儀礼など「全員の非日常」は、集団生活のサイクルで凝り固まった関係性を解きほぐし、次の接着と起爆を誘発する、生活に張り艶をもたらすものなのである。意外にもきっと多くの人が、前向きに自身の生き方を考え直しているのではないだろうか。

有機生物の基本原理は「行為と知覚」の循環、未知なる環境の探索である。頑なになってしまう自分をほぐく種は、いつだって自分以外への働きかけから芽生えるものなのだ。

のぐち・たつへい　「移動、集合、表現」が渾然となった活動を展開。「脱システム× 多方法での世界への介入× 言語を超えた水準〝での記述」を標榜し「芸術探検」と名乗ける。TURN LANDに参加。

68 なぜ今までできなかったんだろう

馬場正尊［建築家］

まさに時代がターン、折り返している感覚がある。みんな家にいて、家族と過ごしながら、並行して仕事をしている。緊急事態が緩んだ後も、保育園に行けない子供たちが、親と一緒に出勤してきて、僕らが仕事をしている横で並んで遊んでいる。いろんなことが混ざり合った、新しい風景を見ている。そしてそれらはなんだか、とっても自然なことで、なぜ今までできなかったんだろうと不思議になってくる。仕事も家庭も、パブリックもプライベートも、リアルもオンラインも、ボーダレス化が進んだような気がする。

人のキャラクターや能力の種類も、きっとどんどんボーダレスになってくると思う。多様な人々の存在に寛容で、それらが調和した、心地よい風景の中で生きていけるとよいなぁ。

以前、南池袋公園で見た平和な風景　撮影＝nest

ばば・まさたか　オープン・エー代表取締役、東北芸術工科大学教授。建築設計を基軸としながらリノベーション、公共空間の再生、地方都市の再生、本やメディアの編集・制作を横断的に行っている。TURNフェス3に参加。

69 コロナ禍の下、逞しく育つこどもたち

濱崎久美子［金町学園 園長］

「金町学園」は、全国から集まった聴覚に障害のある6歳から18歳までの児童（福祉では児童という）15名が生活する子育て支援施設である。こどもたちは、家庭の事情や、通学圏内に適切なろう学校が無い、よりよい教育環境を求めて等々の理由でこの施設を利用している。

施設は元来、「365日24時間営業」であるが、平日昼間は、こどもたちがろう学校や特別支援学校に通っているためにこどもは誰もいないところが、この3月からは「コロナウイルス対策で施設全来の、「365日24時間営業」となった。施設内に留め置かれ、園庭はあるものの心理的な閉塞感漂う環境である。「さて、どうやって日々を過ごさせようか？」

そこで、いずれ自立する日を迎えるこどもたち全員に役立つ調理実習「自分たちの昼食を自分たちで調理する」を核に据え、その他、学習や遊び、余暇活動等で毎日の生活を構成した。

前夜7時に、こどもたちで協議して次の日の献立を決める。献立は、主菜、副菜、デザートの3種。買い物は職員。調理、食事、後片付けはこどもたち。手際が良くなった、できる子がリードし、できない子に教えている、嬉々としてみんながくるくる動いている。困難下であってもこどもたちは成長し前進する!!

昼食を自分たちで調理する

はまざき・くみこ　東京都葛飾区にある、主として聴覚障害児を対象とした福祉障害児入所施設「金町学園」の園長。「金町学園」はTURN交流プログラムに参加。

70 クールベ的、セザンヌ的

深澤孝史［美術家］

例えば近代美術史の始まりについて思いを巡らす。近代に入り、宗教のヒエラルキーから芸術が独立したとき、ゴヤ、クールベ的な芸術の民主化の方向性と、モネ、セザンヌ的な科学的、哲学的な方向性に芸術が舵を切り出した。近代美術の始まりとされるゴヤは、スペインの虐殺された国民のことを思いながら《マドリード、1808年5月3日》を描き、クールベは《オルナンの理葬》で、片田舎の一般人である叔父の葬式を高尚な歴史画として発表し、名もなき人の死を通して一個人の尊厳を表した。セザンヌは印象派の光学的な感性を受け継ぎ、さらに認識論に深め、形相について探究した。またピカソは両者を統合させたことで偉大な美術家として名を残している。

クールベ的方向性は様々な芸術運動やイデオロギー、参加の形態、コミュニティ、公共性、障害やマイノリティなど市民や個人の問題など、射程が広がり、現在では様々なアートプロジェクトを派生させ、セザンヌ的な方向性は芸術の形式の科学的哲学的探究へと続き、抽象芸術、実験芸術、メディアアートなど様々な形式の芸術の連なりを作った。

クールベたちからは、名もなき人びとの死を大切に思うことで世界が作られていることを教わり、セザンヌたちからは、複数の時間、複数の現実を圧縮する詩的な技術が芸術にはあり、そこから影響を受けることで世界や自分たちが変わることを教わった。表現はその時々の必然性の中から生まれている。

コロナ禍では、この生と死についての技術と感性と認識が今一度問われているように思う。一人一人の命が大事になったことで、今生きていることのみが重要になり、逆説的に生の内容や死に対する想像力が失われているかもしれない。今、何が蔑ろにされているのか、どんな可能性が生まれたのかを、今回与えられた時間の中で過去を振り返りながら思いを巡らしています。

ふかさわ・たかふみ　場や歴史、そこにかかわる人の特性に着目し、他者と共にある方法を模索するプロジェクトを展開。TURN LANDに参加。

71 『本当に会わないとできないこと』って!?

藤木和子［弁護士］

「きょうだいの会」――障害児者のきょうだいがいるちょっと珍しい!?――私たちの集まり。

人によっては、飛行機や新幹線がないと、参加できなかった。今は、毎週日じゃないと、参加できなかった。今は、毎週のようにオンラインで絶賛開催中。文字だけのやり取りだったあの子と「会えた」。

時間を共有するってすごい。家から参加できて、飲食は好きなものを自分で用意。ただ、特に年配の先輩の一部は…、電話から私経由でオンライン、全国のきょうだいに接続。

「会う」の概念が完全に変わってしまった。もっと世界の絶景だって、名画だって写真で満足できた私。もう自分から、画面じゃなくて本当に会いたい人って、いなくなっちゃったかもしれない。

医療関係者や多くの方々のおかげで、日常が戻りつつある。何が戻らなくて、画面ではできないことって、本当に会わないとできないことって何だろう!?

TURNとturnとTURN。

オンラインで全国のきょうだいに接続!?

ふじぎ・かずこ　聴覚障害と手話、家族関係を専門とする弁護士。「聞こえないきょうだいをもつCODAソダ&家族」代表。TURNフェス2に参加。「TURN JOURNAL SPRING 2020—ISSUE 03」にエッセイ寄稿。

72 AとBの間に広がる虹色の世界

藤浩志［美術家］

コロナ以前、何が生きづらかったのか、何に対してモヤモヤしていたのか…。違和感だらけの政治、経済システム、日常の多くの束縛、周りの人のズレ、それに向き合い、呼吸できるところへ逃れつつ右往左往してきました。

そしてこの世界的なコロナショック。あれだけ変革したかった社会の脆弱さが露呈され、この機会に動かねばとは思いつつも、これまでのモヤモヤが煙ごと閉じ込められて、感覚がぼやけてやばいのです。

もちろんシェア（共有）することの重要さは明確になりました。空間のシェア、時間のシェア、物のシェア、移動のシェア。それに伴って繋がりの距離（ディスタンス）の中にある空間、つまり中間の領域のデザインに新しい発想と具体的な手法が試される好機です。都市計画をはじめ、住宅、施設などの空間やスケジュールなどの時間、経済活動、教育現場などの仕組み等々、様々な領域での「間＝あいま、あわい」のようなところの重要性が認識され、その多様な具現化が求められています。

日常と仕事との時間の間、家庭と職場との空間の間、自分と他者との間、現実と夢やフィクションとの意識の間、そこに確実にデジタル空間でのコミュニケーションは関与してきます。デジタルコミュニケーションには限りない可能性があります。200年後に振り返ると今はまだその入口に過ぎないのだと思います。

それに掛け合わせるように国のあり方にも大きな変革が求められているように感じています。奄美大島、沖縄などの南西諸島と、青森、秋田など北東北の現場では、大きな経済が動く国の防衛の問題にぶつかります。国と国が戦闘を繰り返す時代は残念なことにまだ続き、その裏で大きな産業が動いてきました。

しかしその防衛では太刀打ちできない相手が登場してきた。これまでの国の仕組みでの対応が疑問視され、物流やデジタルによる、グローバルネットワーク高度化の実情に対応できる「国」という考え方にも、変革が求められているのかもしれません。

そこにもまた「間」の価値化やその具体的なデザインが必要とされてくるのではないでしょうか。もっと緩やかにもっと寛容に。

――

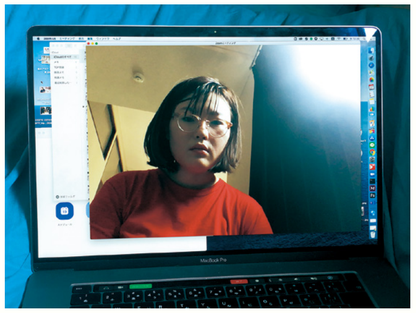
ふじ・ひろし　秋田公立美術大学教授。国内外各地の現場でプロジェクト型の表現を模索、「地域資源・適性技術・協力関係」を活用したデモンストレーション型の美術表現により、対話と地域実験」を実践。第2・6回TURNミーティングに登壇。

73 自分が鏡となって返ってくる

牧原依里［映画作家／ろう者／聾の島プロダクション代表］

今まで自分の顔を見ながら話すことなんてなかった。自分が鏡となって返ってくる、それが今の社会。

――



まきはら・えり　東京国際ろう映画祭を立ち上げ、ろう・難聴当事者の人材育成、ろう者と聴者が集う場のコミュニティづくりに努める。TURNフェス5に参加、第7回TURNミーティングに登壇。

74 変化に強い〝創作〟が今できる事

マチーデフ［ラッパー／作詞家／ラップ講師］

イベントの中止、授業・レッスンの休講、進行中だったプロジェクトの無期限中断など。緊急事態宣言が出されるちょっと前に、4月5月に予定されていた仕事のほとんどがなくなった。

しかしあまりうろたえる事はなかった。貯えがあったからというのもあるが、創作活動の不安を感じる事が特になかったというのも大きい。むしろこの状況だからこそ生まれてくるものに刺激を受け、自分もそういったものを作りたいと創作意欲が湧いてきたし今もワクワクしている。

創作というのは元々ゼロから何かを生み出す行為であり、そういえば今までもずっと変化を繰り返してきた、いわば変化に強い営みだ。一方、我々にその表現の場を提供してくれていた方々は今大変苦しい状況にある。創作物は状況に合わせて変容可能だが、場というのはそう簡単に変容できるものではない。

また、一般社会においてもこの変化にうまく対応できないという人は一定数いるだろう。大人だけじゃなくこども達だってそうだ。学校が休みになって生まれた膨大な自由時間。自分の好きな事に打ち込んでグングン成長していくこどももいれば、毎日ただゲームだけやって終わってしまうこどももいると聞いた。

つまりこの変化に対し、水を得た魚のように活き活きする者もいれば、そうでない者もいるという事。そんな中、今までのように効率化ばかり求めて拒絶や排除を繰り返したら、世界はますます分断されてしまう。それは非常に悲しい。

そうならない為にも、と言うとちょっとおこがましいのだが、我々表現者が生み出す新しい創作物で、変化を楽しむ力と、〝分断〟ではなく〝共存〟の為の想像力を与えられたら良いなと思う。変化にめっぽう強い我々が、今世の中に対してできる事というのはそういう事のような気がする。

――

まちーでふ　ラッパーとして数多くの作品をリリース。また、CMソング作詞やテレビ番組の監修などラップクリエイターとしても活動。現在豊島区の「福祉ホームさくらんぼ」との交流プログラムを行う。TURNフェス5に参加。

75 どこか遠くの景色

松橋和也［学生］

僕は5階建のアパートの5階に住んでいます。古いけれど眺めのいい部屋です。ずっと部屋の中にいると、家の前のスーパーや通りや駐車場など、すぐ近くにあった場所が遠く感じます。窓から見えるそれらは、どこか遠くの景色のようです。僕はこの遠く感じる感覚が好きです。

クロード・レヴィ＝ストロースは『野性の思考』という本の中で美術作品を「縮減模型」としつつ、「縮減模型では全体の認識が部分の認識に先立つ。それは幻想ですぎないかもしれないが、そうだとしても、知性や感性に喜びを与えるその幻想を作り出し維持することがこの手法の存在理由である。」といっています。

今の僕にとって、部屋の中から見える外の世界は絵に描かれたもののように、それをどこか遠くから眺めたときの全体性を錯覚させる「縮減模型」です。

アパートの5階の窓から

76 『未来に帰れ』

まつはし・かずや　東京藝術大学履修証明プログラム「Diversity on the Arts Project」2期生。自身の関心に沿ったフィールドワークを起点に作品制作を行っている。TURN交流プログラム、キューバで開催されたTURN in HAVANAに参加。

77 ずっと、家のかたづけをしている。あるいは、きみがいなくて、さみしい。

松本力［絵かき／映像・アニメーション作家］

ずっと家のかたづけをしている。小さな図書室をつくったけれど、父や母、そして自分の本の整理はまだ終わっていない。他のところは滅茶苦茶で、過去と向き合うことが延々と続いていて、気が遠くなりそうだ。

これを書いていた、44年前の今日、父からの手紙が出てきた。読む度に受取り方が違う。がんばらないといけない。メキシコ映画を検索して、『父の秘密』（Después de Lucia / After Lucia / 2012）をみつけ、その評論を読んで気づいた。愛する「光」を失ったあとで、父がその人への想いを抱いて生きてきたことを、ぼくに伝えようとしてくれたのではなかったかと。

父が好きだったのに素直になれなかったのは、ぼくもだれかにそういう愛情を伝える役目を、まだ果たしていないからだ。父がよく「絶対なんてない」といっていたのは、そういっているのだと。心の暗がりを照らすように、みつめてみなさいと。

小さな庭に、さくらんぼの木の実がたくさんなって、鳥と競いあうように、母と収穫して、果実酒やジャムをつくった。シイの木の花も咲いて、後から後から落ちてくる。まるで、小さな王冠のような花で淡い黄色に染まる道。無数の花を掃き寄せていたら、風が吹いてきて、それが追い風に、向かい風にもなって、渦を巻くこともあった。目にみえないもので、この世界はできているんだなとおもった。

そういうこともあって、ごみ屋敷といわれないように、いや、もういわれているけれど、家の外もきれいにしようとして、庭にいると、いままで知らなかった人たちが行ったり来たりするのをみるようになった。朝早くから走る人、どこかへ連れ立って出かける人、夕方に仕事から帰ってくる人。小さな道だけど、配達のトラック、近道するタクシー、同じ車もよく通る。お互いに、なにをしていたかは、わからないままだろうか。いつもかたづけているけれど、一向にきれいにならないし、きっとおもわれているかな。きれいになったら、声をかけて挨拶できるだろうか。

ある日、家の上空を、ヘリコプターがぐるぐると旋回していた。よく俯瞰して考えるというけれど、見上げていると、なにを見下されているのか不安になった。あとで知ったけれど、いつも、駅やホームセンターへ行く道で、この町で働いている人が車にはねられた。お互いに、なにをしていたかは、知らないままだけれど、ぼくや母であっても、それは同じなのだろうか。いつかこの町で、出会っていた人だろうか。

だれかの記憶に、ぼくがいることを、メキシコのアーティストのリタさんは、「I miss you」と折に触れて伝えてくれる。「I miss you too」と英語で返事を書くけれど、ぼくの記憶にも、きみがいることを伝えられているだろうか。6年前も去年の夏も、彼女の家の窓から眺めた景色や、その町の往来をありありと思い出す。その時間に帰ることはできないけれど、一瞬、そこにいるような気がする。そして、彼女がいう、なぜ、こんなにも日本の友人たちのことをおもうのだろうかと。

間に合わなかった、取り返しのつかないこと、いろいろな人たちの言葉が、ぼくの心に去来する。あの時、あありこうしていればとおもうような、少し寂しい世界に生きている。それは、いままでとこれからの、ながく心に残る言葉、黄昏ゆくリアリティなのかもしれない。

『未来に帰れ』（Back to the Future / 1985 / 1989 / 1990）という映画の台詞がある。

「自分の人生に影響があることは自ら決めなきゃならんのだよ。君は君のなすべきことをやり、私は私の道をな」

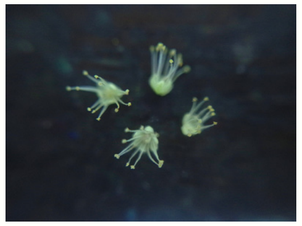
そういう未来の記憶があるから、（自分がいた）未来は自分でつくれ、ということだと。

さよならをいって、それから出会う時、さよならのかわりに、いってあげたい。

きみがいなくて、さみしい。

――

まつもと・ちから　再生紙にドローイングを描き、透過光をあててビデオに撮る独自の手法でアニメーション作品を制作。TURN交流プログラムに参加。


小さな庭のシイの木の花

78 心の根っこを育てる時期

丸山素直［アーティスト／デザイナー］

見えないウイルスと戦っている方々に、尊敬の念と感謝ばかりの毎日です。相手のことを大切に思うほど会えなくなるのが、今回のウイルスの恐いところですね。オンライン上で繋がれることの心強さや利便性はもちろんありますが、直接会って話して笑った時に伝わる空気は共有できません。

今回、自身を見つめ直す機会になった人も多いのでは、と思います。私は落ち着いて心身を整理整頓する時間が増えました。個人的に続けていることの一つに、2013年から身近な花々を日記の様に描いていますが、多忙な時は数ヶ月描けなくなっていました。今こうした時期に、改めて花や植物をゆっくり観察して描くことができています。

自然を観察することは、私が幼いころから好きだったこと。創造活動の原点でもあります。一方で、長年続けてきた色々な地域でのワークショップは、多くの人が協力して創造活動をするものばかりなので、中止や延期を余儀なくされています。しばらくは連隔でできることも模索しますが、できる限り人と人の心が近くに感じられる様な、温かいことを考えたいと思っています。それは私が海外留学をしていた時に、オンラインでのやりとりよりも、直筆の手紙が届いた時の方が数倍感動した経験が大きいかもしれません。

「TURNした今の社会」は確かに変わった部分もありますが、自然界や人間の心は変わっていません。流され過ぎずに、心の根っこを各自が育てる時期ではないでしょうか。収束した時、多くの人が育てたたくさんの花を楽しみにしています。

緊急事態宣言中に描いていた hanabana

まるやま・すなお　パッケージや広告、テキスタイルデザインを行うほか、ワークショップデザイナーとして、幅広い環境に合わせた表現活動を企画。TURN交流プログラムに参加。

79 身辺雑記

宮田 篤［美術家］

3月、新しい生活様式なんていうものを考える前にもろもろ準備していたTURN LANDでのワークショップは延期となり、かわりに福祉職としては猛烈な忙しさがはじまりました。感染対策では本人の健康もだいじな要素となるため（というかすっかり疲れ果ててしまい）、仕事のない日も制作ではなく休養がふえてゆきました。

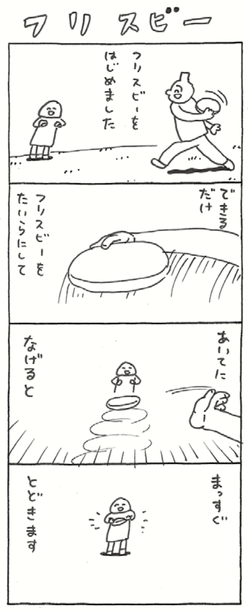
したことといえば散歩、フリスビー、テイクアウトなどなどで、ふってわいたような忙しさに慣れたころ、気づくといつのまにか様子が変わっていました。新しい生活はしかし福祉職としてはなじみのあるもの（手洗い・うがい、じぶんと相手を大切にする）でもあり、ケアが生活になったような、生活がケアになったような気もしています。

TURN LANDとして交流している「小茂根福祉園」さんの状況も、じぶんの勤める施設の状況からいくらかはわかるような気もしており、まだまだはじめるまえの相談という感じです。

そちらはどうか？

ただ、「こちらはこうだが、そちらはどうか？」というようなゆっくりしたやりとりは、相手を思う時間を作ってくれます。ちょうど制作の中に文通の手法をとりいれはじめたところで、願わくばこの一連の体験がなにかまたさらに「新しい制作方式」につながれば良いなと思います。

2020年5月29日



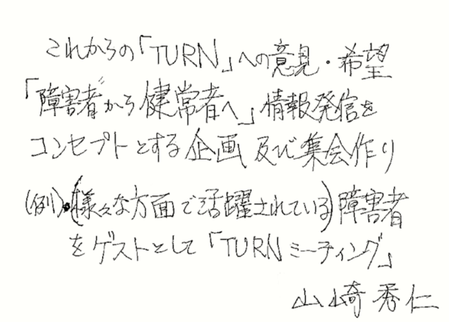
80 離れてても踊る

森山開次［ダンサー／振付家］

もりやま・かいじ　2001年、エディンバラフェスティバルにて「今年最も才能あるダンサーの一人」と評される。演出・振付・出演する作品を発表。TURN交流プログラムに参加、交流の様子をアーティストの冨田了平が撮影し制作した映像をTURNフェス2-4-5で発表。

81 もっと知ってもらえるためのTURN

山崎秀仁［社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンター メンバー］



「社会情勢がきびしい中で、障害のある人の働いている姿や生活のことなどをもっと知ってもらえるといいね」と話しながら書きました（社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンター職員・川村）

やまさき・ひでひと　東京都昭島市にある、就労継続支援事業B型、就労移行支援事業、精神障害者通所授産施設で働くメンバー。「社会福祉法人きょうされんリサイクル洗びんセンター」は、TURNフェス1-2-4に参加。

82 カプセル化した社会で

山蔦栄太郎［エンジニア］

デジタルと現実の境界が曖昧になる。存在がアイコンになり、カプセル化された個人。成果がより目に見えやすくなり、身体はノイズだったと気付く。個人主義、成果主義が進む。自分の身は自分で守らなければならない世界。自己防衛のためという大義名分が与えられ、効率だけを求める社会。自国主義、地域主義が進む。

曖昧、不確かさは動物にとってストレス。内部保護のために、必要な機能だけを外部接続するのは合理的。脆弱な部分を隠し、保守管理を容易にする。偶然、ハプニングの排除。予定調和。無駄を許さない社会。自身を守るために他者との接触を避ける。自国民を守るために国境を閉鎖する。社会と個人を切り離す、世界と国家を切り離し、それぞれがカプセルの中に閉じ籠る。

唯一の危険領域である外界との接続面にばかり注意が向いてしまう。嘘であっても刺激的な情報から過剰な影響を受けてしまう。削ぎ落とされてしまった実体は、これまで緩衝材の役割を果たしていたことに改めて気付く。

我々は無駄・余白を許容するためにこの社会を構築したのではなかったか。デジタルと混じり合うこの世界にもう一度余白を展開しよう。

私はカプセル化したこの社会で未だ見ぬあなたと触れ合いたい。

やまつた・えいたろう　株式会社Ubi-tone代表。音声認識の結果を指点字という手法で盲ろう者の手に伝えるデバイス［Ubi-tone（ゆびとん）］を開発。TURNフェス6に参加を予定していた。

83 12フィートの木材を持ってあるく

山本千愛［アーティスト］

私は2020年の3月中旬に、12フィート（3658㎜）の木材を引きずりながら、徒歩で愛知県を出発した。新しい引っ越し先である福岡県に向かう。

滋賀県に入ると東京オリンピックが延期になった。京都府に入ると著名人の訃報で世間の緊張感が高まった。兵庫県に入ると、7都府県に緊急事態宣言が出された。依然として私は歩いていた。そして兵庫県を歩くのが厳しくなるだろうと思い、船で香川県に渡った。お遍路さんに間違えられたり、お遍路さんではないと見破られたりしながら四国を通り、いくつかの島を歩いて本州に戻った。

本来は賑やかだと思われる観光地は静まり返っていた。普段から人が歩く姿はないと思われる田舎道を、息を上げながら歩いていく。新型コロナウイルスによって変化したこともあれば、変わらないこともある。その両方を身体で味わいながら、木材は地道に削れてゆく。

巷で声高に掲げられた「STAY HOME」。家があるという前提が、愛知県を発った私にはなかった。たどり着くまでSTAYする家がない。そして5月初旬に山口県に入って間も無く、新型コロナウイルスの影響で福岡県での住む当てがなくなってしまった。目的地と帰り道を失う。

そして、通過点のはずだった山口県に住むことになった。2ヶ月前には全く想像もしていなかった展開だ。新型コロナウイルスによって現れた選択肢である。偶然か必然か、山口県で生活を送ることそのものが、私にとってTURNした今の社会に向き合うことであると考えている。その中にしかヒントはないだろう。そうだ、これからだ。12フィートの木材は2170㎜になっていた。

万博記念公園で「私ね、障害者手帳あるから、私と一緒に入れば無料で入れるわよ、ついておいで」と声をかけられ、親しくなったおばあさんに撮ってもらった写真

84 そのあとのステイホーム

渡辺 篤［現代美術家］

やまもと・ちあき　自身のプロジェクト「12フィートの木材を持ってある く」を2016年より実施。日本全国を木材を持って歩き、その過程をアーカイブし、作品を制作している。TURNフェスに参加を予定していた。

「ひきこもりは加害者でしょう？　家族を苦しめる急情でズルい人達だと思う」と語る人と先日出会った。

では、その彼らの生活を「巣ごもり」や「ステイホーム」と見たら駄目かな？　この社会と「ソーシャルディスタンス」を保っていると見る事は出来ないかい？　見方を変えれば、我々が〝生きづらさ〟というウイルス〟を社会に蔓延させてきたのかも知れない。

社会が一時停止したこの期間、国内に110万人以上居ると言われる、ひきこもり当事者たちはどの様に過ごしていただろう。「2ケ月程度家から出ないくらいで〝ひきこもり〟を名乗らないでよ！」って気持ちにさせたかも知れない。緊急事態宣言を終えたら、「振り向きもせずここから出て行くんなら、『自粛頑張ってて偉い！』って言葉置いてってよ」って思わせたかも知れない。

彼らが生きづらさの中で掴んだ、痛みも伴う記号としての属名「ひきこもり」。それすら、社会は素早く我が身のものとして語り、しかしそれも混乱を極めたマスク問題と共に消費し捨て去るだろう。

どんな事情の孤立にも僕は寄り添いたい気持ちがある。けれど、これまでもこれからも続く「継続的孤立」と、突然起きた「一時的孤立」の違いは冷静に見定めたい。それらを、一緒くたにして他者の持つ当事者性を〝理解出来た事にしては駄目だと思っている。もちろんあのウイルスによる自粛期間、あらゆる人が心身や経済的な痛みを負い、そして自分事として孤立の社会課題に触れる、意味のある時間でもあった。

自らの経験を通して見えるもの。それでも全ては見えない他者の思い。やっぱり話を聴く事、対話をする事の必要性に気付く。

この期間、オンライン交流の技術や認知は拡がった。一部、〝壁の向こう〟にもそれは行き届いたとも見える。コロナ後の世界にも続いていく「ステイホーム」は沢山ある。その声を聴けたらと思う。

わたなべ・あつし　他者を知ることの可能性と困難さについて取り組み、今日的で深刻な社会問題を、アートを用いて批評的に取り扱う。近年は元当事者である「ひきこもり」にまつわるテーマについてのプロジェクトを多数実施。TURNフェス6に参加を予定していた。

85 家で描く。

渡邉慶子［作業療法士／袋田病院 職員］

4月～5月にかけ、「袋田病院」のアトリエを閉所しました。閉所に伴うアトリエメンバーへの影響を心配していましたが、アトリエでの活動を応用し時間を過ごしている方が少なくないことを知り、驚きと安堵を覚えました。ある方は、ご家族に材料を用意してもらうことで、日頃の制作について知っていただく機会となりました。

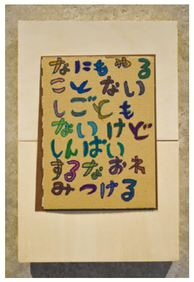
ある日、定期受診で来院したメンバーの一人が、ご自宅で描かれた絵を持ってきて下さいました。それらの多くは段ボールや菓子箱に描かれています。絵には、季節や心境が表現されており、そして、その運筆にはどこかゆとりすら感じられました。私は、彼女の作品を観て、季節の移ろいをすっかり見過ごしていたことに気付かされました。彼女に心動かされ、急遽院内に展示をすることにしました。

慌ただしさの中には、何かに想いふける心のゆとりも時間の余裕もありません。しかし、あえてその時間を作ると、今それが必要というよりもむしろ日頃からそうした時間が必要だと、教えられている気がします。

現在、私は外来の検温係をしております。お一人と関わる時間は1分にも満たないのですが、閉鎖的で緊張した生活を余儀なくされている今に、来院される皆様にとって少しだけ印象に残る時間となるよう努めています。

急遽、屋外に設置した発熱者診察室。プライバシー保護のための目隠しに、アトリエの版画を使用

院内での展示の様子。いつになく、職員から展示についての質問、感想が多数寄せられました



藤田うさぎさんの作品の一つ

わたなべ・けいこ　茨城県久慈郡大子町にある医療法人直志会が運営する精神科病院の職員。第6回TURNミーティングに登壇。「袋田病院」は、デイケア「アトリエ・ホロス」を長年行っており、病院を地域へ開く「袋田病院アートフェスタ」を毎年開催。TURNフェス4に参加。

アートのX（エックス）

日比野克彦
［TURN監修者／アーティスト］

遠くを見たり、近くを見たり。動いてみたり、止まってみたり、絶えず周囲のことを感じながらも自身の意思で行動できる。我慢する時は我慢できる知恵をもつことを心得ている。絶えず思い通りにはいかないことが当然であると考えることによって得られる自由がある。平等だということを唱えることはどこかで歪みが来る。すべてが平（たい）らで穏やかな時間は永遠に現れない。絶えず動いて、歪み続けるから、その反動が推進力になり先に進める。どこからかやってくる大きな力、真に大きな力は、もはやパワーという言い表し方ではなく、身体を知らぬ間にすり抜けていく…そんな透明感のある巨大な質量をここ最近感じている。

経済とか政治とか国とかは人類が生き物として生存競争をしながら発明したシステムだから、どこか人間至上主義の独りよがりなところがあり、万物的には不備がある。しかし一方、アートというXは人間が生まれる前からあった。アートというXは永遠にあり続ける。なくなりはしない、人が絶滅しても、アートのXはある。宇宙がなくなったとしてもアートのXはある。大きな透明感がある力は人間が発明したシステムでは対応ができなくなっている、だから…私はアートのXに抱きついてみる。

2020年6月7日

ひびの・かつひこ　東京藝術大学美術学部長、美術学部先端芸現芸術科教授。アートを社会の中で機能させる手法を試み、地域や多業種の人々との共同プロジェクトを展開。2015年より「TURN」の監修を務める。

p.12–13に作品掲載

編集後記

心が何かに動き、良いものに出会った時、人に話したくなり、人に会いたくなる。演劇を見たり、映画を見たり、トークを聞いたり、美味しいものを食べたりした時にふと湧き出るそんな気持ちに、「人といる」ことが普通にできた社会は直（す）ぐにそれに答えてくれた。

しかし、新しい感染症の到来による今の状況はどうだろう。「不要不急」という言葉のもと、生活において「何が必要で、何が必要でないか」を問われるなか、大切にするものと価値観の違いが現れた。

「生きるために」「生活するために」「仕事を進めていくために」優先すべきことを判断し、それによって見えてきた違いを携える者同士のわだかまりや諍（らそ）いも自ずと生まれていく。これまであった日常と大切な何かを手放し、何かに迫られ、そんな日々のなかで、私たちは何を新しく生み出し、手にしていくのだろうか。

2015年、東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトの一つとして始動した「TURN」は今年6年目を迎え、一つの集大成として大きく展開していこうとしていた矢先、新型コロナウイルスの影響でこの時期足踏みをすることとなった。

「TURNフェス2020」、そして「交流」を軸にした数々のプログラムの実施そのものの検討に入る一方で、期せずして「TURNらしさ」を再考し、その上での実施とはどのようなものなのかを考える契機となった。それらを通して、「TURN」は新しい展開の仕方を模索しながら歩みだそうとしている。

今年度の『TURN JOURNAL』は、取り巻く環境の様々な変化と向き合い、また日々変化する現代社会の状況や課題に応答しながら、多様性のある社会と今後の「TURN」を考えていくメディアとして発信していきたいと思う。「今」に応答した言葉が、読者の内部でつながり、また外部にも語り継がれていくことで、新たなつながりを生み出していけないだろうか。

言葉の断片や集積が、「個」でありながらも普遍性を帯びていく。また、普遍性を問いながらも「個」に立ち戻ることのできる言葉。そして、色々な「個」がありそのものを認識し、存在していることを、共にいる人と楽しみ、これから新しく出会う人たちと共に育んでいきたいと思う。

新しいOS（オペレーション・システム）の実験の場としての「TURN」の様々なプログラムと、「個」と普遍性を伴った言葉のプラットフォームを編み出していく『TURN JOURNAL』の往還を通して、次なる社会への一助となる手掛かりを見つけていきたい。

（畑まりあ）

「TURN（ターン）交流プログラム」……アーティストと、福祉施設や社会的支援を必要とする人々が時間を重ねて交流し、共働活動するプログラム。また、アーティストによる、社会や日常で意識化されていない課題への気づきを目的としたリサーチも行う。

「TURN（ターン）LAND（ランド）」……福祉施設や団体が、アーティストとともに参加型のプログラムを企画する。それぞれの場所に備わった従来の機能に、地域にひらかれた文化施設としての役割が加わり、市民と共に日常的に「TURN」を実践する場をつくる。

「TURN（ターン）フェス」……「TURN交流プログラム」や「TURN LAND」を実施する、多様なアーティストや交流先の活動が一堂に集まるフェスティバル。作品展示やワークショップ、トークイベント、オリジナルプログラムなど様々なコンテンツを通じて「TURN」を体感できる。

「TURN（ターン）ミーティング」……「TURN」の可能性を共有し、語り、考え合う場。参加アーティストや交流先などの関係者と共に、各分野で活躍するスペシャリストを招き、様々な視点から「TURN」を考察する。

『TURN JOURNAL』のバックナンバーは、こちらからご覧いただけます

『TURN JOURNAL 2018』

『TURN JOURNAL SUMMER 2019—ISSUE 02』

『TURN JOURNAL SPRING 2020—ISSUE 03』

TURN

主催＝東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人Art's Embrace、国立大学法人東京藝術大学
監修＝日比野克彦
［アーティスト／東京藝術大学美術学部長・先端芸術表現科教授］
プロジェクトディレクター＝森司
［アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長］
TURN公式ウェブサイト＝turn-project.com

TURN JOURNAL　SUMMER 2020—ISSUE 04
2020年7月31日発行

監修＝森司［アーツカウンシル東京］
編集＝永峰美佳
杉原環樹
畑まりあ［アーツカウンシル東京］
田村悠貴、山口麻里菜［特定非営利活動法人Art's Embrace］
デザイン＝星野哲也
印刷＝株式会社アトミ
発行＝公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28
九段ファーストプレイス8階
TEL＝03-6256-8435＼FAX＝03-6256-8829
Email＝info@turn-project.com
URL＝www.artscouncil-tokyo.jp

©2020 Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」とは
オリンピック・パラリンピックが開催される東京を文化の面から盛り上げるため、多彩な文化プログラムを展開し、芸術文化都市東京の魅力を伝える取組です。「TURN」は、その一環として展開しています。